

---

.hack//a gleam of hope

親衛隊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

hack / a gleam of hope

### 【Nコード】

N6444B

### 【作者名】

親衛隊

### 【あらすじ】

ネットゲーム、「The World」で起こる意識不明者事件。目の前で姉と姉の仲間達を失った少女、リリナは立ち上がる。このゲームはただのゲームじゃない。だけど・・・。「絶対、お姉ちゃんは・・・返してもらおう！」やがてそれが、リアルをも巻き込む戦いに発展するとは知らずに。

## FILE0:プロローグ(前書き)

「.hack/Roots」「.hack/G.U.」などの  
ネタバレを過分に含む予定です。

## FILE 0：プロローグ

七年前——The Worldで意識不明者を助ける為に戦い続けた英雄達がいた。

ドットハッカーズ  
hackers。

「腕輪」を持つ赤き双剣使いをリーダーに、世界を救う為に戦った者達である。

そして、その英雄達の中に、

「腕輪」の所持者を支える一人の女性がいた。  
プレイヤーキャラ  
PCネーム、ルーン。

紅い髪を一つにまとめ、滝のように流した孤高の槍使い。

美しい相貌には、ルーン文字のカノ・・・人生を導く明かりを表す記号が彫られている。

金糸で縫い上げられた皮製の鎧に身を包み、長い髪には蝶を模した美しい髪飾り。

そして手には古びた槍を持つ。

彼女は勇者と共に、女神に

「指輪」を授けられた。

「腕輪」を支える力。

使いすぎれば暴走を起こす腕輪の強大な力を押さえ込み、なおかつ多少ではあるが腕輪を操作する力を持つ神秘の指輪。

彼女は指輪を持ち、彼の隣に立ち続けた。

やがて意識不明者を救い出す事が出来た後も——

そして

「世界」が消えた後、数年の時を経て再び世界は英雄達を巻き込み始めた。

新たな勇者達と、旧世界の英雄達。

現実と仮想の全てを巻き込み綴られていく運命。

悲しみと苦しみと辛さが続く戦いの中へ、それでも彼らは迷わずに  
踏み込んだ。

守る為。救う為。

この世界で笑う為に。

勇者と英雄に、どうか夕暮竜の加護のあらんことを。

## FILE 0：プロローグ（後書き）

更新遅いですが頑張ります。感想がありましたらどうぞ。

## FILE 1：始まり（前書き）

・hackシリーズのネタバレを含んでいく予定です。

## FILE 1：始まり

私には大切なお姉ちゃんが居る。

いつも笑っている、強くて綺麗なお姉ちゃん。

ある日突然、お姉ちゃんは倒れた。

「The World」。この世界で運命の歯車が回った。  
望んで、のことではない。

「お姉ちゃん」と

「お姉ちゃんの仲間達」の全く望まぬままに。

歯車は回ってしまった、否——狂った、のかも知れない。

ある日突然、

「ルーン」と

「ルーンの仲間達」は世界の中で消えた。

「The World：R2」。今や世界で圧倒的人気を誇るMMORPG・・・ネットゲームだ。

そのリアル以上に美しいグラフィックに誘われ、今や全世界で何百万という人間がプレイし、またプレイヤー人数も増え続けている化物ゲーム。

「だから、鈴菜<sup>りりな</sup>もやってみようよー」

ソファアーに転がった美女が、ゲームの広告チラシをちらつかせながら私に声をかけてきた。

私のお姉ちゃん、響<sup>ひびき</sup>という女性である。

「お姉ちゃん、またその話？だから、私は興味ないってば・・・」

お姉ちゃんは数年前まで

「The World」の熱心なプレイヤーだった。私はプレイしてないのでいまいち分らないが、とても有名なプレイヤーだったという。

そんなお姉ちゃんがゲームをやめたのは、今から3年前。

三年前、サイバーコネクトCC社の火事があった。

最高峰のPC及びPC周辺機器メーカーで知られるCC社は、同時にMMORPG

「The World」を筆頭とするネットゲーム開発運営で有名である。

そして火事が起こったのは、当時の

「The World：R1」を開発していた開発室だった。

データは火事で全て消失。残ったデータも、消火活動の水を被り泡と消えた。

かすかに残ったデータでは運営もままならず、

それからしばらくしてThe Worldは正式に運営を停止した。お姉ちゃんが愛していたThe Worldは、お姉ちゃんが愛用していたPCもろとも消えてしまったのだ。

以来、R：2としてThe Worldが復活した今も、お姉ちゃんはゲームをプレイしていなかった。

だが。

「いいじゃない！一緒にプレイしようよ。二人で一緒に始めようよ」最近になって、急にお姉ちゃんはR：2を始めようと私に持ちかけてくるようになった。

「何で？いいよ、別に興味ないし・・・」

私は元来人見知りをするたちだ。今でも普通に話が出来るのは数人の友達とお姉ちゃんだけで。

そんな私が不特定多数の人々の集まるネットゲームに参加すること

など出来なかった。

だが、そういうとお姉ちゃんは必ずこう言ってくるのだ。

「それこそネットゲームで人見知りを直すチャンスじゃない！それにね、」

お姉ちゃんは私の目を見て、微笑んでいた。

「ネットゲームの楽しさ、出会いを鈴菜にもちゃんと体験して欲しいと思ってるの」

お姉ちゃんはThe Worldで、とてもとても大切な出会いをしたという。

それはゲームをしなければ絶対になかった出会いであり、ありえなかった思い出。

それを私にも体験して欲しいのだ、感じて欲しいのだとお姉ちゃんは繰り返し説いた。

繰り返し繰り返し、次第に熱弁をふるうようになっていく。

普段のお姉ちゃんは無理強いはいしない。

「人が嫌がることはやっちゃ駄目だ」

がお姉ちゃんの信条だから。

しかし今回のみはお姉ちゃんは引き下がってくれなかった。

お姉ちゃんがこういう行動をとる理由は、大体一つ。

これが私にとつていいことであると信じているのだ。

人付き合いが苦手な私を助けられるかも知れないから。

そして、ネットゲームを好きになってくれるかもしれないから。

お姉ちゃんなら私があまりゲームに対していい思いを持っていないのを知っているだろう。

思い出せば、R1時代からお姉ちゃんは私にゲームをさせようとしていた気がする。

「お姉ちゃんは英雄だぞ？」

とか言いながら、笑っていたのを覚えている。

「この世界を頑張つて守ったから、鈴菜にも見てほしいんだよ」  
当時の私は小学校三年生。

流石にネットゲームは早いかな、とその時はお姉ちゃんから身を引いたのだった。

だが七年の時を経て、今の私は高校一年。

マナーやネチケットなどをちゃんと学校で学んだ。  
ネットゲームをするには丁度いい歳となったのだ。

力説し、説得するお姉ちゃんはとても強い。

自分のしていることを信じて突き進む力のあるお姉ちゃんはとても強いのだ。

私はいつも、その力にあこがれていた。

お姉ちゃんのようになりたいと、思っていた。

だから、私はその言葉に惹かれたのだと思う。

「お姉ちゃんだって、ゲームで見つけた仲間のおかげで強くなれたんだから！」

もし、私がこの言葉を聞いてなかったら。

私がThe Worldにログインする事は、絶対になかっただろうと思う。

もし、この言葉を聞いていなかったら。

お姉ちゃんは、あんな事にはならなかったのかもしれない。

そしてもし、私が<sup>リリナ</sup>The Worldに居なかったら――

「・・・分かった。分かったよお姉ちゃん！」

「ふえ？」

話の中でいきなり声を上げたので、お姉ちゃんは思わず変な声を上げていた。

「分かったって、だからゲーム！一緒にやろう！」

・・・私はその時初めて、

お姉ちゃんがポカンと口を開けて呆けているのを見た。

「・・・え？ホントに？」

「うん、やろうつて」

お姉ちゃんの表情がめぐるましく変わっていくのを見るのも、多分初めてだ。

いぶかしむ様に眉を寄せたあと、

疑惑、不安、思案、樂觀思考へと表情が動いていき・・・

「そっか、じゃあソフト買おうソフト！」

と今までの思案顔は何処へやら、

あっけらかんとして満面の笑みを浮かべていた。

こうして、私は胸に強さへの憧れを密かに秘めて、

お姉ちゃんは妹と二人のプレイへの楽しみに胸を躍らせて。

私達はThe World:R2をプレイする事になったのである。

## FILE 1：始まり（後書き）

更新遅いですが頑張ります。感想がありましたらどうぞ。

## FILE 2：初めて世界に降り立つ日（前書き）

・hackのネタバレを含んでいます。

## FILE 2：初めて世界に降り立つ日

「The World R：2」をゲームショップで購入した私とお姉ちゃんは、それぞれの部屋に戻っていた。

今から一緒にゲームをしようというのに、別々の部屋に入るというのもおかしい話だ。

ネットゲームでは一人一台PCを使わなければいけないのだから、まあ当然のことなのだろう。

部屋の机に置いてあるPCにディスクを入れながら、私は窓を開けた。

隣の部屋のお姉ちゃんも窓を開けているので、部屋を行き来しなくてもこれでお互い会話ができる。

私のPCのディスプレイに、

「The World」の文字が浮かんた。

説明書を見ながら新規登録を選ぶ。

必要事項を打ち込んでクリック。

次に画面に浮かび上がったのは

「キャラクター名登録」。

カタカタカタ、とキーボードに指を走らせながら、

「お姉ちゃん、お姉ちゃんのキャラクター名はどうした？」

窓のほうに向かって呼びかける。返答は早かった。

「ルーン！カタカナでルーンだよ！」

それは確か、R1時代にお姉ちゃんが使っていたPCの名前だ。

「鈴菜は？」

お姉ちゃんから帰ってきた問いに、私は自分が画面に入力した文字を読んだ。

「リリナ。カタカナでリリナ」

「・・・そりやまた、飾り気の無いというか・・・」

「いいでしょ、シンプルで」

少し苦笑気味のお姉ちゃんにそう返すと、鈴菜はPCに視線を戻した。

画面には

「プレイヤーキャラクターエディット」の画面が浮かんでいる。

種族・・・顔・・・身長に、体型に髪型に髪や瞳の色。

それに服装やボディペイントなどが選択できるようだ。

「凄い種類・・・」

私はそのPCデザインの多さに圧倒された。

流石は化け物ゲームとまで言われるほどはある。

凝る人ならきつと何時間も何時間もかけてPCを作っていくのだろう。

だが、そんなに時間をかけるつもりは私には毛頭ない。

だから、すべて直感で決めることにした。

獣型はどうも向いてなさそうなので人型にする。

髪の色は・・・蒼。自分の大好きな濃い青空の色。

瞳の色も同系色を選択する。

それから顔と体型と身長。

これはリアルの自分に似せて作る。

肌の色は平均的な肌色。

衣装は、動きやすさを優先した革鎧にした。

肩やお腹のむき出しになった姿は、ちょっとした私の強さの憧れの象徴だ。

そしてボディペイント。

私は前にお姉ちゃんに教えてもらった、ルーン文字の事を思い出した。

記憶に強く残る二文字がある。

「ソウイル」と

「ベルカナ」。

「S」を直線三本で描いたような字がソウイルで、

「B」を刺々しく書いたような字がベルカナである。

太陽を表すソウイルは、希望や勝利を与える意味を持つルーン。ベルカナは白樺を表し、誕生や豊穣といった意味がある。そして・・・成長という意味も含んでいる。

今の私にはこれが、一番ふさわしいような気がした。

私は自分の分身に、

ソウイルを右の頬に、ベルカナをむき出しのお腹に刻み付けた。

これで、私のPCは完成した。

制作完了をし、次の過程に移る。

次に現れた文字は、

「職業選択」。

「ジョブ・・・？」

どうやら、ゲームでの自分が扱える武器をここで決めるらしい。

現在この

「The World:R2」で利用できるジョブの数は十一種。呪紋使い系ジョブ三種に剣士系ジョブ八種だ。

回復呪紋を主体に使う

「呪癒士」。

攻撃呪文主体の

「魔導士」。

誘惑的な雰囲気漂う

「妖扇士」。

二本の短剣を操る

「双剣士」。

正統派剣士

「斬刀士」。

重剣で敵に打撃を与える

「ブラディッシュ撃剣士」。

長い槍を振り回す

「バルチザン重槍士」。

巨大な鎌を使う

「フリックカー鎌闘士」。

遠距離戦に強い

「スチムガンナー銃戦士」。

己の拳で闘う闘士

「グラップラー拳術士」。

そして、数種類の武器を扱う

「マルチエボン錬装士」。

私がゲームをする目的は、  
もちろん

「お姉ちゃんのように強くなりたい」からだ。

その目的を考えれば自然と呪紋使いタイプの職業は外れる。  
だが残り八種から、どれを選べばいいものやら。

「お姉ちゃんは確か、重槍士だったかな・・・」

無意識に、重槍士にカーソルを合わせそうになって、私は慌てた。  
(私はお姉ちゃんになりたいんじゃない)

心で言い聞かせる。

(お姉ちゃんのように、強くなりたいんだ)

しかしこのままではジョブ決定もままならない。

ここはやはり、頼れる姉の意見を仰ごう。

「お姉ちゃん、何かオススメのジョブってあるー？」

今度の返答は、遅かった。

「・・・んで・・・どうして・・・？」

小さな疑問が、風に流れて聞こえた。

「・・・お姉ちゃん？」

もう一度声をかけると、向こうから慌てたような返事があった。

「なっ、何っ!？」

「だから、オススメのジョブはない?って」  
それから、

「・・・何かあったの?」

「・・・うっん、なんでもない」

お姉ちゃんは少し咳払いをした。自分を落ち着かせるときに使う癖だ。

「んで、お勧めのジョブだっけ?」

もうその後は、いつもの明るいお姉ちゃんだった。

「うん。出来れば呪紋使い系以外で」

「うっん、そうだな・・・」

お姉ちゃんが思案する唸り声を上げ、そうだ、と呟いた。

「撃剣士、どう?」

それは重剣を使いこなし、遅いスピードをパワーと破壊力で補う戦士。

おおよそ普段の私からは想像もつかないようなジョブだ。

お姉ちゃんならモヤシな私を見て、双剣士とか言うと思ったのだが。

「・・・何で?」

何で、撃剣士?

「R1の時、私の仲間の重剣使いが居てさ」

黒き薔薇の名を冠した彼女は、決して曲げない信念と明るさを持っていた強い女性だったそうだ。

「その時に重剣ってかっこいいなと思っててさ」

そう言ってから慌てたように付け足す。

「あ、でも私は槍が一番好きだったけどね」

「ふーん・・・」

決して曲げない信念と明るさ。

強い、女性。

今の私が欲しいものを、お姉ちゃんと同じように持っている女性。  
お姉ちゃんの信頼を持つ、黒き薔薇。

——そんな人間に、なりたい。  
否、なつてやる。

そのために私は、このゲームに入ると決めただ――

決意を決めた私の手は、撃剣士をクリックしていた。

キャラクター制作完了。

確認の為の画面が現れ、次へ進む。

遂に、ログインの時がやってきた。

「お姉ちゃん、一緒にログイン……」

窓に向かって呼びかけた私を待っていたのは、  
意外な一言だった。

「……ゴメン、ちょっと時間かかるかも。先にログインしてくれる？」

「え？」

一緒にログインするものだとばかり思っていた私は、完全に不意を突かれた。

「どうしたの？キャラエディット終わんないの？」

結構大雑把な所のあるお姉ちゃんが、細かいこだわりを見せるとは思えなかったが。

「ううん、ちよつと機械トラブル……みたいなものよ、大した事ないっ」

最後の方は、無理やり明るく振舞っているようにも聞こえた。

「先にログインしてて。すぐ追いつくよ。カオスゲートの前から動かないでね」

「……うん、分かった」

こういう時のお姉ちゃんがてこでも動かないのは、私もよく知っている。

私は一人、サングラス型のゲーム用ディスプレイM2Dを装着し

た。

ログインボタンがM2Dに映っていた。

緊張―初めてのネットゲームへの期待と不安。  
私はゆっくりと、ログインボタンを押した。

そして私は初めて、ザ・サルト世界に降り立った。

## FILE 2：初めて世界に降り立つ日（後書き）

更新遅いですが頑張ります。感想がありましたらどうぞ。

**FILE3: Welcom to “The world” (前書き)**

・hackシリーズのネタバレを含みます。

FILE 3 : Welcome to “The world”

ロゲインが完了した。

私がそこで目を開けて初めて目にしたものは、

天井が高い荘厳な建物の内部だった。

異国情緒溢れるそれは、まるでリアルにもありそうな精巧さ。

そして圧倒的なまでに美しさを誇る。

圧倒された。

本当に、圧倒された。

「これが・・・The World・・・」

ふと私は自分の姿を見下ろした。

腰の辺りまである、長めに設定した蒼い髪が視界に少し入る。

動きやすさのみを重視した、華美ではないが露出の多い革の鎧。

むき出しのお腹にクッキリと映し出される赤い紋章。

自分で先ほどエディットしたキャラクター。

これが・・・リリナ——もう一人の、私だ。

このリアルさと美しいグラフィック。

私は初めて、The Worldをプレイする人達の気持ちを理解した。

「凄い・・・」

興奮で震える手でコントローラーを操作し、歩く。

少し歩いてから振り返ると、この建物の内部がよく分かるようになった。

ドーム、というのが一番正しいのだろう。

屋根が部屋の中央に向かって、球体のようにだんだん高くなってい

る作りだ。

何人かのPCが、ドーム内で雑談を楽しんでいる。

丸い部屋の真ん中には、青く輝く球体が金色の枠に囲まれて鎮座していた。

ターゲットすると名前が表示される。

『カオスゲート』

確か説明書に載っていた。

別のエリアやタウンに移動する時に使うワープシステムだ。

「綺麗・・・」

ただの移動手段だというのは分かっているのだが、思わずため息が出る。

キラキラと輝くカオスゲートは、混沌の門という名とは裏腹に神秘的な光を放っていた。

「ねえねえ、その君！」

ぼんやりとカオスゲートを眺めていた私に、いきなり声がかかった。

「え・・・私？」

「そうそう、拙らは君に声をかけているでござる！」

振り返ると、そこには二人の男女のPCの姿があった。

男性の方が口を開く。

「君、初心者でしょ？」

「・・・えつと・・・はい」

一瞬答えるのに逡巡した。

知らない人にいきなり話しかけられて、

私の「人に対して臆病な心」が首をもたげてしまったのだ。

そんな自分を変えるために来たというのに、情けない。

私の逡巡を、初心者の名乗る事へのためらいだと受け取ったらしい。女性PCの方が親しげに言う。

「別に恥ずかしがる必要はないであろう？皆最初は初心者でござるw」

「そうそう」と男性PCも頷く。

「初めて来て驚いたろー。グラフィックめっちゃ綺麗だしなw」

「初心者皆ここに降り立つと思わず足を止めてしまっでござるよ」

「は・・・はい、私も思わず見とれちゃいました」

悪い人達ではない、のだろうか。

私はこのゲームは、R2に入ってからあまり治安が良くないと聞いていた。

だが、初心者だと分かっている上で話しかけてくれるPCがいる。無意識にじっと見つめてしまっていたのだろう、男性PCが笑顔で名乗った。

「悪い悪い、名乗ってなかったよな。俺はIyoten。で、こっちが」

「拙の名前はアスタでござる」

女性PC・・・アスタの方は不思議な喋り方をするな、と思いつつ。慌てて、私も名前を名乗った。

「え、えと、私は・・・リリナ。リリナです」

「そか。リリナ、よろしくw」

「よろしくでござるw」

「え、はい、よろしく願います・・・」

思わずペコリと頭を下げた。

サラサラとした長い髪が流れてくるのを手で首の後ろに払う。

「そんなに硬くなんなくてもよいでござるよ？w気軽に、気軽にw」アスタが笑いながら手をパタパタと振った。

「ねえ、そんな事よりさ」

Iyotenが人のいい笑顔を浮かべながら、

「操作方法教えてあげるよw今から一緒にエリア行こうぜ？」

こんな提案をしだす。

「え！？」

驚く私を尻目に、アスタがぽんと手を合わせる。

「いい考えでござるなー、Iyoten！拙らも暇だったし、丁度

良いでござる！」

「そうだろ？wどつか良いエリア、あつたかなあ」

驚きで戸惑っている私を尻目に、二人の会話はどんどん進んでいく。どうしよう。

悪い人たちではなさそうだけど・・・。

でも、私はここでお姉ちゃんを待たなければいけない。

「あの・・・」

「そうだな、そのエリアにしよう・・・どした？」

アスタともりあがっていたIyotenが、思い出したようにこつちを見た。

「私、あの・・・」

「緊張しているのでござるか？w」

断ろうと口を開けば、アスタが割り込んできた。

「しょうがないよな、初心者だし。安心しろよ、俺たちがサポしてやるってw」

「え・・・いや、その」

「ほら、行くでござるよw」

人見知りの私は緊張と混乱で対処の仕方が分からなくなっていた。どうしよう、どうしよう？

頭の中がぐるぐるする。

断り方が分からない。

救いの手は——後ろからやってきた。

カオスゲートの転送音と同時に。

「そのの二人、その誘いは断らせてもらっ」

凜とした、女性の声がした。

私が顔を上げ、二人が振り返る。

そこに、綺麗な紅い髪の女性が立っていた。

「悪いが、それは私の連れだ」

男性口調の女戦士。

「・・・あんだ、何だよ」

瞬間、Iyotenの声に苛立ちとか不快とか、そんな色が混ざったのを私は聞いた。

その紅い女性PC名は・・・ルーン。

「リリナの姉だよ、Iyoten。それにアスタ」

お姉ちゃん――

「何で、拙らの名を・・・」

「BBSはチエックするものだろう？」

お姉ちゃん・・・ルーンは髪の毛を右手でかき上げながら言う。

「初心者を狙う悪質なPKの話題が出ている」

ギツと、二人を睨みつけてルーンは言い切った。

「PKの名前はIyotenとアスタ。・・・お前たちだろう？」

二人の顔が、変わった。

「・・・ちつ。引つかかなかったでござるか」

アスタが侮蔑をこめて舌打ちする。

私の顔がこわばった。

さつきまで、あんなに親しげだったのに。

「・・・けっ。つまんねえな」

Iyotenも玩具を奪われた子供のように忌々しげにルーンを見つめた。

そして二人は、私を無視してさつきとカオスゲートから消えてしまった。

「・・・大丈夫か、リリナ」

呆然としていた私を心配したのか、ルーンが私の顔を覗き込んできた。

「大丈夫、だけど・・・驚いた」

私は正直に答えた。

ルーンは無言で私にメンバーアドレスを渡す。

「パーティーの誘い方、分かるか？」

「うん」

メンバーリストに載ったルーンの名前を選び、パーティ編成を行う。ほとんどルーンのステータスが画面に表示された。そして、

「・・・私は、そのルーンのパＣのステータスの高さに呆然とした。

「さつき、作ったばかりじゃ・・・」

「いや、その話は後にしよう」

ルーンはドームから一直線に伸びる廊下を歩き始めた。

私も置いていかれないように、慌てて歩き出す。

「このゲームは、M M O R P Gだ。つまり、不特定多数の人間が居る」

ルーンは歩きながら、呟くように語り掛けた。

「それだけの人間が居れば、さつきみたいな奴も居る」

「P・・・Kってやつ？」

「そうだ。P Kを楽しみたいがためにこのゲームをプレイしている人間も、少なくない」

これが、私が聞いた「治安の良くない」The worldの正体なのだろう。

「だが、そうで無い人間も居ることを忘れないでくれ」

「お姉・・・ちゃん？」

「ルーン、だろう？リリナ」

私をたしなめると、ルーンは足を止めた。

目の前に扉がある。

「・・・人それぞれの楽しみ方がある。それがThe worldだ」

ルーンがゆつくりと、扉に手をかけ、開いていく。

その向こうに広がっていたのは・・・

「言っのが遅れたな」

夕暮れに輝く、カオスゲートなど比べ物にもならない美しい世界を背に。

ルーンは夕日の赤い光に照らされた顔で、笑顔を浮かべた。

「Welcome to “The world”」

私は、かみ締めるようにその言葉を胸に刻んだ。

ようこそ、The worldへ。

**FILE3: Welcom to “The world” (後書き)**

更新遅いですが頑張ります。感想などありましたらどうぞ。

## FILE 4：明日も世界が待っている（前書き）

・hackシリーズのネタバレを含んでいきます。

#### FILE 4：明日も世界が待っている

ルーンと私は、夕焼けの街をしばし散策すると、その日はログアウトした。

街を回っている間に、

私が持ったルーンのPCステータスへの疑問は、完全に吹き飛んでいた。

それほどまでにこの世界は美しく魅力的だったのだ。

ログアウトしM2Dを外した後も、私は呆然と世界の余韻に浸っていた。

△サーバーのルートタウン

「マク・アヌ」。

黄昏時を迎えているその石造りの街並み。

夕日に照らされ輝く海や川。

広場にギルドショップを開いている売り子たちの掛け声。

笑顔を見せ合いながら立ち話に興じているPC達。

全てが、想像以上の世界だった。

まるで虚構と現実の立場が完全に入れ替わっているような気分。

これがただのオフラインゲームであつたら、こんな気持ちにはならなかつただろう。

The worldにはリアルの人間たちが居る。

リアルの人間たちが息巻いているからこそ、

そこには優しさや楽しさがあり、

そして暴力や争いがある。

その儚く崩れてしまいそうな危うさが、あの街並みをそれ以上に美しく見せているのだ。

The worldはまさに、ある意味の現実だった。

（随分と電波な事を考えてるな、私）

思わず笑ってしまった。

ただ、意見を撤回するつもりは無い。感じたものは本物だ。

あの世界なら現実を捨てて逃げ込む人が居てもおかしくない。

ネット廃人の気持ちが分かってしまうというのも、何か微妙な話ではあるが。

コンコン、と部屋のドアをノックする音が聞こえて、私は我に帰った。

「いいよお姉ちゃん」

今日も親は居ないので、大好きな姉だろう。

「お邪魔しまーす」

許可の声をかけると、すぐに扉が開いてお姉ちゃんが入ってきた。

お姉ちゃんの声を、何週間かぶりに聞いたような気分だった。

受けた衝撃が大きすぎたのだろう。

実際のところ、2時間程度のプレイだったのだが。

しかしこの声は、先ほどまで一緒に行動していたルーンとはとても同一人物と思えない。

「どう？The worldは」

お姉ちゃんは私の部屋のベッドに腰掛け、いすに座る私に目線の高さを合わせる。

「・・・どうしてもっと早くプレイしなかったのか、後悔してる」

私は苦笑しながら本音を語る。

「あはは、それじゃせいぜい後悔しておくんなさいって」

お姉ちゃんは心底楽しそうに笑った。

思い起こせば、今まで何度も何度もゲームへの勧誘を受けた。

本当に、何でこんなにも素晴らしい世界を、私は見ようとしてもしなかったのか。

過去の自分に会えたら殴ってやる。そう決めた。

ところで、私はお姉ちゃんに先ほどの疑問をぶつけてみた。

「ねえ、お姉ちゃん。そういえば、ゲームだと口調違ったよね」

正直私は

「ルーン」と

「榎本 響」の差に結構驚いている。

お姉ちゃんはああ、と事も無げに頷いた。

「私のはロールプレイだよ」

「ロール・・・プレイ？」

「なりきりプレイ、とでも言うのかな」

お姉ちゃんはR1時代からのロールプレイヤーらしい。

「孤高の重槍使い」を演じ続けていたお姉ちゃんは、

実際に紅眼のルーンの二つ名を与えられた有名人だったそうだ。

「今はどうなってるのかと思ったけど、ロールプレイヤーもまだ結構健在らしいね」

今日会ったPKもそうだったでしょ、

そう言われて私はあのアスタの

「ござる」口調を思い出した。

あれもロールプレイの一環なのか。覚えておこう。

そこまで考えて、私はふと一番聞いておきたい疑問を思い出した。

「お姉ちゃん、あのPCのステータス・・・」

言いかけたときだった。

丁度良く、ぼーん・・・ぼーん・・・と時計のなる音がした。

「うわ、もうこんな時間じゃん!」

プレイし始めたのは夕方だった。既に日は暮れ、夜の闇が訪れようとしていた。

お姉ちゃんは慌てて立ち上がる。

「ごめん、ちよっと買い物してくる!」

「え、ちよっと、話の続きは・・・」

部屋を飛び出そうとしていたお姉ちゃんは、

足を止めて私を振り返った。

「その話は“ルーン”としてしたい。The worldで明日ね」

その真剣な面差しと真面目な言葉に、私はもうそれ以上追及できなかった。

お姉ちゃんは大学生だが、学校には殆ど籍だけを置いている状態だ。別に引きこもりとか馬鹿だからとかではない。むしろ逆だ。

お姉ちゃんは天才なのだ。

ほぼ卒業に必要な単科を最初の一週間で取得してしまったのである。だから学校で何かを学ぶ必要も無いのだが、

何故かお姉ちゃんは飛び級で卒業しようとはしない。

お姉ちゃんはネットリーディングを生業としている。

夜中は仕事と大学用のネットワーク研究論文で忙しくなるため、話をすることは殆ど無いのだ。

だからお姉ちゃんは

「明日」と言っただろう。

今日はもうゲームはおしまいだという意思表示だ。

お姉ちゃんはいつもの、綺麗で明るい笑顔で言った。

「明日はダンジョンに潜るよ。リリナの初戦闘、頑張ろうね」

そのいつもの笑顔と、心躍る明日への期待が生まれる言葉。

私は、そのお姉ちゃんの魔法であつという間にぐたぐた考えることをやめた。

「うん！」

これからは、明日も明後日もあの素晴らしい世界が私を待っているのだ。

その時の私は、期待と喜びに包まれた一人の少女だった。

これからその

「素晴らしい世界」で何が起こるのかも知らない、  
無垢なプレイヤーだった。

#### FILE 4：明日も世界が待っている（後書き）

更新遅いですが頑張ります。感想などありましたらどうぞ。

**FILES：戦闘を始める！（前書き）**

・hackシリーズのネタバレを含んでいく予定です。

## FILE 5：戦闘を始める！

その日、私は学校終了と共に教室を飛び出した。  
早く帰りたい、早く帰りたい！

早く帰って、お姉ちゃんとの世界に行きたい！  
その思いが私をせかしていた。

こんなに早く帰りたいと思ったのは初めてかもしれない。  
昨日始めたばかりだというのに――

――完全に、私はThe worldの虜であるようだ。  
バス停に来ていたバスに飛び乗る。

私の家は学校から一時間程度もかかる遠い場所だ。

「遠くて大変だね」とよく言われるが、別に不便を感じたことも無い。

読書をしたり、宿題をしたり。

ぼーっと何か考え事をするにはいい時間だと思っているからだ。  
なのに今日だけは、早く早くと思いつけている自分が居る。

はやる気持ちだが、バスの中でどんどん膨らんでいた。

\*\*\*

「ただいまッ！！」

それなりに――否、普通の家よりは十分広い一軒家。

私は派手な音を立てて玄関のドアを開け、

転がり込むように家の中に飛び込んだ。

広い玄関先に靴を脱ぎ捨て、バタバタと足音も大きくリビングに駆け込む。

「お姉ちゃーん、ただいまッ！！」

リビングのソファで、お姉ちゃんは転がっていた。

大体いつもこの人はこんな感じで転がっている。

「お帰り、鈴菜」

顔を上げたお姉ちゃんは、肩で息をする私を見て苦笑した。

「そんなに焦らなくても、ゲームは逃げないって」

「わ・・・わかってるけど・・・」

髪はぼさぼさ、制服は乱れ。

自分の姿を見返して私は少し赤面した。

「わかってるけど・・・楽しみだったんだもん」

そう。早くあの世界に行きたかった。

「・・・そか。じゃあ早速」

ソファから立ち上がったお姉ちゃんは、

「行ってみよつか？」

悪戯っ子のような笑みを浮かべていた。

\*\*\*

マク・アヌのカオスゲート前。

私が立っていると、ワテンポ遅れてルーンがログインしてきた。  
相変わらずの美麗グラフィックの世界。

「分かってると思うが、今日はエリアにでる」

ルーンはカオスゲートを振り返った。

「エリアや別のサーバータウンに行くには」

「このカオスゲートを使う、でしょ？」

説明書に載っていた。

「そうだ。それじゃ、スリーワードシステムは知ってるな？」

「もちろん！」

このカオスゲートでのエリア転送は、このゲーム独特のシステムを  
起用している。

それがスリーワードシステムだ。

エリアは

「1stワード」

「2ndワード」

「3rdワード」の三つのワードで構成されている。

その組み合わせを変えることで、異なるエリアに飛ぶことが出来るのだ。

プレイヤーは掲示板や口コミを利用してワードを集めることが出来る。

コミュニケーションを取れば取るほど、ワードも手に入るというわけだ。

「そうか。それじゃリリナ、私をパーティに誘ってくれ」

「了解！」

私はすぐにパーティに誘った。

一拍の後、ルーンがパーティに加わる。

「よし。じゃあカオスゲートでエリア選択だ」

「うん！」

私たちはカオスゲートに向き直った。

カオスゲートを選択すると、いくつかの項目が現れる。

「エリアワード入力・・・と」

エリアワード入力のカテゴリをクリックすると、ワード入力画面が現れた。

「初心者にはまだ3つのワードしかない」

ルーンに言われて私は頷く。

「となると、最初にいけるエリアは一つなんだね」

「そうだ。じゃあとりあえずそのエリアワードを組んでみる」

「わかった」

私が今持っているワードは、

1stワード

「勇み行く」

2ndワード

「初陣の」

3rdワード

「夢の果て」

の三つである。

（これを、組み合わせて、と・・・）

選択画面で全てのワードを入力する。

「出来たよ、ルーン」

振り返ってルーンの顔を見る。

ルーンは優しげに微笑んでいた。

お姉ちゃんの・・・

「榎本響」の顔とは違う顔。

でも、何故か似ている——気がする。

「じゃあ、早速行くか！」

「はい！」

私は、画面に出た

「このエリアに転送しますか？」という文字に、

「はい」のボタンをクリックした。

ログイン時にも私たちの体を包んだ青い光が、私の視界を奪った——

△勇み行く 初陣の 夢の果て△

エリア到着早々、私はまたもや言葉を失っていた。

マク・アヌの荘厳なドームから転送されて視界に開けたのは。

「すごい・・・草原だ・・・」

風が吹いてきて、私の蒼い髪を揺らした。

その風すら、リアルで感じてしまいそうなほど。

視覚にあまりにも精巧な世界が広がっているから、

他の感覚まで、それを感じてしまいそうになる。

「・・・いい場所、だな」

ルーンが風になびく紅い髪を押さえながら、同じように世界を見回している。

抜けるような青さを持ち、雲の一つ一つが抜けるような白さで。

リアルでも、もう滅多にお目にかかれないような清々しい空。  
私はそれに感動すら覚えた。

「・・・行こうか、リリナ」

「・・・うん！」

私とルーンは草原の中を、ゆつくりと歩き始めた。

\*\*\*

マップの表示の仕方、ミッションの確認の仕方。

私はルーンと二人で色々と確認をし合いながらエリアを進んだ。

「このミッションは、“証の欠片を全て集める”だね」

「アイテム収集系ミッションか。なら宝箱を探せばいいな」

草原エリアは綺麗な場所だった。小島同士を橋でつないだ作りになっている。

その橋を渡ろうとして・・・私は前方に見えるものに気がついた。

「ねえ、ルーンあれ・・・」

「ああ、遂に・・・」

そこには、低い円形の台座があった。宝箱がその上に置かれている。  
そして・・・それを囲むように。

ファンタジー映画に登場する小鬼のような生き物が居た。

ターゲットすると、

「ゴブリンルーキー」という名前が表示される。

モンスターだ——・・・

初めて見る、魔物。

私は緊張する。

その肩に、優しく手が置かれた。

「遂に初戦闘だな、リリナ」

「ルーン・・・」

ルーンは背中に手を回す。

白い光が弾け、そこから現れるのは彼女の獲物だ。  
何処か古びた、だが荘厳な雰囲気を持つ槍。

既にルーンは

「重槍士」として、そこに立っている。

「説明書はちゃんと読んだか？」

私の緊張を感じ取ってか、優しく微笑んでくれた。  
魔法のような笑顔だと思う。

それはPCを通じてでも、届いてしまう神秘の魔法だ。

「うん、説明書の戦闘の仕方は覚えてる」

「そうか。ならあとは実践で掴むしかないな」

ルーンと私は、敵の方をしっかりと見つめた。

私の右手が、肩の後ろに回される。

何も無い空間に、柄の固い感触を感じた。

私の、力。私の武器。

「・・・ッ！」

力いっぱい、柄を引き抜いた。

はじける光と共に、私の手に現れる一振りの重剣。

これが私の、力。武器。

グッと、柄を両手で掴む。

「行くぞッ！！」

そして私とルーンは、地面を蹴った。

## FILE 5：戦闘を始める！（後書き）

遂に初めての感想を頂きました！しかもお二方から！

これからも精進していきます！応援よろしくお願いします！

感想がありましたら、どうぞ！

## FILE 6：ある一つのターニングポイント（前書き）

・hackシリーズのネタバレを含んでいく予定です、

## FILE 6：ある一つのターニングポイント

ルーンの槍の一閃が、油断していたゴ布林ルーカーの一匹を斬り飛ばす。

「リリナ！そっちは自分で戦え！」

ルーンからの、戦士としての言葉。

それが戦いの合図となった。

青い光が私達の周囲に壁を生み出す。

「バトルエリア」だ。

条件を満たさない限り消える事のない絶対城壁。

アイテムを使用するか、モンスターを全部撃退するか。

もちろん始めたばかりの私達は逃煙玉なんて持ってないから――  
答えは一つに決まった。

ゴ布林達は一齐に私達に襲い掛かってくる。

私はゴ布林の攻撃に、緊張と驚きで一瞬頭が真っ白になった。  
どくん、どくん。心臓が早鐘を打つ。

（落ち着け、私）

ゴ布林ルーカーは初心者向けの最弱モンスター。

それが分かっているにも怯んでしまったのは、

世界があまりにもリアルだったからか。

（落ち着け、私！）

右肩を敵の武器がかすめる。

飛び散る紅。少しだけ裂けた肌。

まるで現実で受けた怪我を見てるような精巧な世界。

プレイヤー自身である「鈴菜」も右肩に痛みを受けたような気分。

視覚でしか見ていないはずなのに。

その視覚が本物のような画像を映すから。

だから他の感覚まで怪我を受けたと思い込む。

それが恐怖を呼び、また動きを封じるのだ。

（落ち着け、私ッ！！）

心であらん限り叫んだ。

これはゲームだ。目を覚ませ。落ち着け。

肩に痛みはない。ゲームだから。

（説明書を読んだ。強い攻撃力のジョブを選んだ。いけるはず！）

コントローラーを握る手に、力がこもった。

いくら精巧な世界でも、これは現実<sup>リアル</sup>ではない。

そしてここに居る私もまた、リアル<sup>リアル</sup>の私とは違う。

（私は——リリナ。・・・撃剣士だ！）

私は高校生の「榎本鈴菜」ではない。

今の私は強さを求める、姉に憧れを抱く戦士だから！

敵の攻撃がまた腕を掠めた。

画面にHPが減る赤い数字が表示された。

リアルでは無いゲームの仕様。

減っていくHPに焦りより安堵を感じたプレイヤーは、私が初めて

かもしれない。

それから私は、落ち着いて戦闘態勢を整え始めた。

まずは一旦バックステップ。

敵の武器の一閃を紙一重で交わし、横に居たもう一匹のゴブリンの

攻撃を重剣を盾に防ぐ。

（戦闘の基本——まずは状況確認！）

説明書の言葉を思い出す。大丈夫だ、やれる。

一旦モンスターから離れてあたりを見渡す。

そして——さっきの決意を忘れるほどに呆然とする。

ゴブリンルーキーの数は4匹「だった」はず。

既に二匹が・・・黒い煙と化し消えている。

（ルーンが！？）

私は異常なルーンのスータスの高さを思い出す。

「ぼさつとするな！来てるぞ！」

その声に我に返ると、目の前に刃が迫っていた。  
「ッー!!」

その場で後ろに飛ぶ。頭より先に体が動いた。  
私の首があつた部分を、敵の武器が横に屈いた。

「危なーっ」

思わず口にした。

（集中しないと）

ルーンは「明日話す」と言ったのだから、ステータスの事はあとで聞けるはずだ。

今考えてもしようがない。

（それより今は目の前の敵!）

私は剣の柄をグツと強く握った。

リアルでなら持ち上げられようも無い巨大な重剣。  
今は・・・振れる。

「はああああッッー!!」

私は剣を肩の高さまで振り上げると、地を蹴った。

二匹のゴブリンが近づいてくる。

手には武器を、目には殺意を持って。

私が近づいていく。

手には力を、目には意思を持って。

「ああああああッー!!!!」

私は敵の目前で——一気に剣を叩きつけた!

衝撃波が周囲にまで及び、二匹のゴブリンが仰け反る。

（——今だッ!）

私は全力で再び強靱なる刃を持ち上げる。

二匹のゴブリンが体勢を立て直し武器を構えるのと、  
私が強い力を体に解放するのは同時だった。

「食っええええーッッー!!」

私の刃が振り下ろされる。

その一撃は一匹のモンスターを弾き飛ばし、

振り下ろした反動で振り上げた二撃目はもう一匹を切り上げた。  
スキルアーツ：虎乱襲。

剣の重みと力に任せて行いうVの字斬り―初心者が使っことの出来る、  
最初のスキルだ。

「ギヤアアアッウ！」

二匹のモンスターの口から漏れた悲鳴が、途切れた。  
モンスターの体が黒い煙と消える。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

私は今、自分がどういうことをしたのかすら考えられなかった。  
倒した。モンスターを、自分の力で。

パチパチパチ。

拍手が聞こえる。

「倒せたじゃないか、リリナ」

「ルーン・・・！」

ルーンは優雅にすら思える優しい笑みを浮かべながら、私に手を伸ばす。

瞬間。青い光が私の体を包み込んだ。  
体につけられた傷と、HPが回復していく。

回復アイテムを使ってくれたようだ。

「ありがとう、ルーン」

「いや、気にするな」

ルーンはそういうと私の顔を覗き込んだ。

「感想はどうだ？初戦闘」

うう、と私はちよつとうめいた。

「・・・リアルすぎて、ビビりました」

自分で言っていてなんだが、物凄く恥ずかしい。

「・・・」

一瞬あっけに取られたルーンは、  
きつと「楽しかった」「怖かった」ってコメントをされると思っ  
たのだろう。

あははははははは！！

ルーンはこれでもかというほど笑った。大いに笑った。かなり笑った。

「ちょっと・・・笑わないでよ・・・」

言いながら、自然に笑みがこぼれる自分が居る。

「それは今までのツケだろ、リリナ」

ルーンは笑いの発作を押さえ、目じりに浮かんだ涙をぬぐいながら言った。

「これほどリアルになるまでの過程を見てこないからだ」

「うう、結局そこかあ・・・」

すなわち、今までゲームをするどころか見ても居なかったから、という事。

「何で私、ゲームしなかったんだろうなあ・・・」

言っても仕方ないと思いつつ、私は憎いほど青い空に向かって愚痴った。

\*\*\*

「やっと集まったな」

ルーンは宝箱から最後の「証の欠片」を取り出した。

「これで最後かあ・・・長かった気がするな」

あの衝撃の初戦闘の後も、私とルーンはモンスターに遭遇した。ルーンから指導を受け、自分でも少しずつ恐れを感じなくなり。

私はようやくレベルも上がった。2Lv。まだまだ弱い。

そんなこんなで紆余曲折しながらも、宝箱から証の欠片を集めていたわけだ。

最後の証の欠片は突然キラキラと輝き出した。

そして、私が持っていた残り二つも呼応するように輝き始める。そして、三つの欠片は一つになった。

名称が「証の欠片」から「富神者の証」に変わる。

その直後、ゴゴゴ・・・と遠くで、何か重いものが動くような重々しい音が響いてきた。

「獣神殿、開いたみたいだね」

「ああ。行くか」

獣神殿の扉を開き、最深部の富神者の神「フォルセト」の像――一般的には獣神像と呼ばれる――に供えられた宝箱を開ける。

それがこのエリアのミッションクリア条件だった。

「楽しみだね、宝箱」

私の言葉にルーンもうなずいた。

「頑張つてから手に入れる宝箱は格別だぞ？w」

「うん！何が入ってるのかなー。武器かな、それとも防具？」

私達は楽しく語らいながら、道中を引き返し始めた。

\*\*\*

獣神殿は、私達が通ってきた道を引き返してすぐの所にそびえていた。

石造りの巨大な神殿で、最初に見たときには塞がっていたその入り口は開いていた。

入り口からすぐに階段が続き、その最奥に大きな扉が構えている。

「遂に宝箱だ・・・」

私はまたもや緊張してきた。何度このゲームでドキドキしたことが松明に照らされた獣神殿の内部のリアルで神秘的な作りが影響してるのかもしれない。

「さ、開くぞ」

ルーンは扉に手をあて、内側にそっと押し始めた――

そのとき、私は運命的な出会いを果たす。

今後の長い時をずっと、「彼」と私に関わっていく人。

もつとも、このときの私には知る由もないのだけれど。

物語のターニングポイントの一つに、私はこの時に触れたのだ――

神殿内の獣神像の放つ蒼い光の前に、一人の影があつた。

「・・・先客が居たのか」

ルーンがバツが悪そうに頭をかいた。

「・・・誰？」

光に照らされた影が、声を聞き取つたのか振り向いた。

真っ白な姿だつた。

一番最初に目に付くのは、白くてやや大きな帽子。

次に目に付くのは身に着けているワンピースや袖、ブーツの白。

羽のようなデザインの黒いケープを纏い、

穏やかな顔には涙の形のボディペイントが泣きぼくろのように描かれている。

「・・・えつと、宝箱、取りに来た人かな？」

まさに「白衣の天使」といった姿の、呪癒士の女性がそこに立っていた――

## FILE 6：ある一つのターニングポイント（後書き）

もつすぐ、Roots沿いの物語が展開します。  
感想などございましたらどうぞー。

FILE7：“志乃”（前書き）

・hackシリーズのネタバレを含んでいます。

## FILE 7 : “志乃”

白い呪癒士の女性との予想外の遭遇――。

驚きのあまり私は固まってしまっていた。

そんな私を尻目に、ルーンは気さくに片手を上げながら呪癒士に近づいていく。

これもネットゲ経験の違いだろうか。ルーンは全く緊張していない。

「悪い、先客が居たとは思わなかったんだ」

「ううん、別に構わないよ」

それから呪癒士は少し首をかしげた。

「初心者さん？」

「ああ。私はR1のヘビーユーザーで妹はネットゲほぼ未経験者」

「ああ、それでロールなんだ。それで、なんかプレイ慣れしてるんだね」

ルーンは私を手招きした。私は恐る恐る、二人に近づいた。

頭をよぎるのは、笑顔で私に接してきた二人のPCの顔。

この世界には、笑顔の下に獣の本性を隠す「人間」が居る。

この人は大丈夫なのだろうか？

私の不安を感じ取ったのか、ルーンは私の頭をぼんぼんと軽くなでる。

「名乗るのが遅れたな。私はルーンだ。こっちは妹のリリナ」

少なくとも、ルーンは彼女を「大丈夫」と取ったようだった。

「二人とも呼び捨てで構わない。よろしくな」

「よ、よろしくお願いします・・・」

ルーンが大丈夫というなら、きっと大丈夫なのだろう。

私も頭を下げる。

「ルーンとリリナ、だね。私の名前は――」

優しい呪癒士は私とルーンに右手を差し出した。

「——志乃。よろしくね」

握手を交わす。

呪癒士——志乃さんはふわりと微笑んだ。

それを見て、私もこの人は良い人だと悟った。

何というのだろうか。リアルを見ているわけではないのに、

この人が悪人であるはずが無いとはっきり感じるのだ。

滲み出る優しさを感じさせる雰囲気を持つ人だ。

さすがルーンは人を見る目があるな、と私は思う。

「志乃は初心者・・・ではないよな」

ルーンはまじまじと志乃さんを眺める。

回復呪紋を主体とする呪癒士。

初心者用エリアといえどLv1の呪癒士が一人で最深部まで来るのは難しいだろう。

撃剣士の私ですら、それなりの苦勞をしたわけだし。

「うん、あえて言うなら・・・R2のヘビーユーザー、ってところかな」

それなりにLvも高いんだよ？と志乃さんは言う。

そんなに高レベルな人が、どうして初心者エリアに？

私は疑問を感じた。だがそれを言葉にする前にルーンが口を開く。

「なら、お願いがあるんだが・・・」

「お願い？」

志乃さんは首をかしげる。

私も何事かとルーンを見やる。

ルーンは頬を掻きながら、ちよつと言いくそうに呟いた。

「悪いんだけど・・・宝箱、リリナに譲ってやってくれないか？」

「え？私？！」

思わず叫ぶ私。

「やつとネトゲの楽しさを分かってくれた妹の初戦闘の記念なんだ」  
ルーンは顔の前で手を合わせる。

「この通りだ、志乃」

志乃さんは少し驚いたように口元に手を当てると、少し笑って宝箱の前を退いた。

「そんな事しなくても、かまわないよ？宝箱を取りに来たわけじゃないから」

「さ、どうぞ」

絵画でいう聖母様のような笑み。

「感謝する」

ルーンは私のほうを振り返った。

「ほらリリナ、開けてこい」

「え・・・でも・・・」

私は逡巡した。

ここに先に来てたのは志乃さんだし、譲ってくれと頼んだのはルーンだ。

志乃さんが譲ってくれたなら、ルーンの方が開けるのには相応しいと思った。

迷っているうちにルーンに手を引かれて宝箱の前に立たされる。

「ほら、開けなつて」

「でも・・・本当に、いいんですか？志乃さん」

隣に居る志乃さんに視線を向ける。

志乃さんは柔らかい笑みをたたえたまま、静かに頷いた。

「お前がここまで戦ってきたんだ。お前のだよ」

「・・・うん！」

私はそつと宝箱の前に片膝をついた。

手を伸ばし、箱のふたを両手で掴む。

初めての戦い。初めての出会い。初めての宝箱。ドキドキする。

「それじゃ・・・開けます」

緊張をほぐす様に大きく息を吐くと、私は箱を開けた――。

出てきたのは一振りの剣。

初心者レベルの武器であり、決して強くはなかった。  
でも、それは私が初めて手に入れた宝物。

「おめでとう、リリナちゃん」

「よかったな、リリナ」

二人が拍手してくれた。

さっそく装備してみなよ、と志乃さんは微笑んだ。

装備変更の方法をルーンに習いながら、私はたどたどしく剣を構える。

「・・・似合うよ、リリナ」

「ホント!？」

「うん、かつこいい」

姉の言葉が、志乃さんの言葉が、嬉しかった。

このゲームには闇の部分があるけれど、それ以上に素晴らしい光の部分があること。

私はそれを、身をもって知ったのだった。

FILE7：“志乃”（後書き）

感想を続々と頂いてるのに、更新が遅くなって申し訳ないです・・・

orz

これからも頑張ります！！

## FILE 8：紅き戦士の力（前書き）

・hackシリーズのネタバレを含んでいます。

## FILE 8：紅き戦士の力

「さて、宝箱も開けたことだし」

ルーンは皆をまとめるように手を叩き、

「エリア、出るか」

そう言つて笑つた。

「そうだね。でも、その前に・・・」

志乃さんは私とルーンに向かって手を差し伸べた。

「“志乃”のメンバーアドレスを手に入れた！」

明るい効果音と共に。

いきなり、私の視界にそんなテロップが流れた。

「え・・・！」

私は驚いて志乃さんを見やる。

志乃さんは微笑を絶やさず、頷いた。

「お友達記念。二人とは気、合いそうだから」

「奇遇だな。私も同じ事を考えていた」

ルーンが志乃さんに手を伸ばした。

私も慌ててコントローラーを操作する。

ウィンドウを開いてメンバーアドレスの項目をクリック。

クリックした時点でメンバーアドレスの教え方を知らない事に気づいたが、

直感で操作する。

ちゃんと送れたかとドキドキしながら顔を上げると、志乃さんと目が合った。

志乃さんは笑う。

どこまでも柔らかな笑顔が似合う、大人びた女性だ。

「そんな顔しなくても、ちゃんと届いてるよ」

「よかったあゝ・・・」

私はホッとして、胸に手を当てた。

「動作が大袈裟だぞ、リリナ」

ルーンが苦笑する。

「さ、早くタウンに戻る？」

志乃さんは獣神殿の扉に向かう。

タウンに戻るときは、プラットホームと呼ばれるオブジェクトを使う。

草原エリアでは獣神殿の外に配置されているので、獣神殿の外に出る必要があつた。

「ああ」

ルーンと私は志乃さんと共に獣神像を後にした。

そして。

獣神殿の外、青空の下に出た私達は。

その空の青さや太陽の光に目を細める暇もなく。

何故かプレイヤー達に囲まれていた。

\*\*\*

「!？」

私は右を見、左を見、何とかこの状況を理解しようとした。

獣神殿の出入り口をぐるりと覆うように、何人かのPCが居る。

ぱつと数えて、十数名といったところか。

殺伐とした空気。嫌な雰囲気。獣を狩るけどものの目。

雰囲気だけで、私は彼らが何なのかを悟ってしまった。

そのうちの一人が私達に気づき、周りのPC達に合図をする。

「・・・何か、用？」

PCに声をかけたのは志乃さんだった。

声が心持ち、硬い。

「いやあ、全員女だ！ビンゴビンゴw」

志乃さんの質問には答えず、狼のような姿の獣人PCが、にやりと笑った。

その笑顔がおぞましくて、鳥肌が立ちそうになる。

「綺麗なお姉さん方を、狩ってみたかったんだよねえ」

別のPCが自らの剣を抜いた。

「私達に何のようだと聞いているんだが」

ルーンが一步、前に出る。

「ここまで来たら、ひ・と・つ・し・か・ないっしょ？w」

PCが武器を抜くのを合図に、他のPCたちも次々に獲物を手に構え始めた。

「・・・PK・・・！！」

私は思わず後ずさった。

志乃さんが初心者達の私達を庇おうと前に出ようとして、

ルーンが手でそれを制した。

「・・・初心者狙いのPKか。獣神殿の前で待ち伏せとは、・・・性格悪いな」

一人の男性PCが、ルーンの台詞を聞いてケラケラと笑い出した。

「そりやどうもwおねーさんこそ、初心者なのに上手なロールじゃん？w」

別のPCがはっ、と笑った。

「・・・俺、後ろの蒼いガキをやるぞ」

大柄の獣人が、肩に担いだ鎌を構える。

ビクリ、と私の体が過敏に反応した。

悪意を・・・最初に会った二人組みのPKの時とは桁違いの悪意を向けられている。

「それじゃ、俺はこっちのオネエサンねw」

「それじゃおれはその呪癒士」

男達は楽しげに、心底楽しげに獲物を狙っている。

吐き気がした。

何だこいつらは。

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い！

直接当てられた悪意が、心底——怖いと感じている自分がいた。

「・・・リリナ、武器を出して後ろに下がってろ」

「・・・え？」

小さく、小さくルーンが呟くその言葉に、私は顔を上げた。

「私と志乃で何とかする。だから、少し下がっていてくれ」

その言葉に驚いたのは私ではなく、志乃さんだった。

「・・・相手はそれなりにレベルもあるPCだよ？」

いくらR1のヘビープレイヤーだったとしても、R2では初心者。

PCは制作したでレベルは低く、新しく追加されたバトルコマンドも使い慣れてない。

そんなプレイヤーが、今日の前に居るPK共を倒すことなど、不可能だった。

志乃さんの目から見たら、それが普通だった。

ルーンが、普通なら。

「だからといって、志乃だけでは倒せないだろう」

ルーンは自らの槍を抜いた。

志乃さんは確かに高レベルPCかもしれない。

だが、彼女のジョブは回復主体の呪癒士。

囲まれてしまっている現状、呪紋詠唱のモーションをする暇は与えられないだろう。

元々呪癒士は攻撃を主体としないジョブだ。

とてもじゃないけどPKに囲まれて無事で済むはずがない。

「私が斬り込む。必ず、隙が出来る。・・・そこを狙ってくれ」

「・・・わかった」

志乃さんは自らの背に手を回した。

光が弾ける。志乃さんの手が掴み、引つ張り出したのは一振りの呪杖だった。

呪癒士の扱う、武器だ。

私も、震える手で剣を構えた。

さつき貰ったばかりの、宝物を。

武器を取り出す獲物を目の前に、PKは沸いた。

「お？抵抗する気か？」

「うひょー、殺りがいがあるってもんじゃん？w」

そのうちの一人が、もう我慢できないといわんばかりに飛び出してきた。

真っ直ぐに、真っ直ぐに剣を構えてルーンへと直進してくる！

「オネーサン、いい悲鳴で鳴いてねッー！！」

男が嘲笑と喜びに溢れた声を上げた、その瞬間――

吹き飛んだのは、男の体だった。

「――え？」

何が起こったのかわからない、そんな声を発しながら。

男は死亡表示の灰色のグラフィックに変貌し、地面に叩きつけられていた。

「！？」「何だ！？」

PK達が驚きのあまり動揺する。

その渦中に、凜とした一人の紅い女戦士が居た。

手には槍を持ち、強く敵を見据えている。

「ま、まさか・・・てめえが！？」

一人が驚きのあまり上ずった声になる。

「手前、初心者じゃ・・・ねえのか！？」

色めき立つPKを前に、ルーンは何も言わなかった。

ただ、一歩後ろに下がるのみ。

「・・・？」

そこへ。

「・・・レイザス!!」

志乃さんの放つスペルが飛んだ。

放たれた光の矢は、直線状に並んでいたPC達を次々に貫く。

「なッ・・・!？」

その光に気を取られ、顔を志乃さんの方に向けた男は、

「どこを見ている？」

「ッ!？」

目の前に迫ったルーンの刃を見たときには、全てが遅かった。

\*\*\*

まさに、圧倒的。

女戦士は、圧倒的な強さだった。

ルーンのパラメーターの高さは私も知っていた。

だが、数値化されたそれを見ても実感はなかった。

目の前に広がる、この光景を目にするまでは。

すでにPKたちは半数以上が倒され、数名は逃げ出している。

ルーンの放つ段違いの攻撃。

志乃さんの完璧なまでの補助。

さつき会ったばかりでPTも組んでいない二人の女性が、PK達を圧倒している。

凄い。

頭の中に浮かぶのはそれだけだ。

強くて羨ましいとか、かっこいいとか、

どうしてそんなに強いのか、そんな感情以前に。

私は呆然とその戦いを目の当たりにしていた。

完全に、油断していた。

だから——私の背後に、PKの一人が移動しているのに気づくのが遅れた。

「——！！！」

「こうなりや手前だけでも道連れだッ」

私を狙うと宣言していた獣のPKだった。

「死ねええええええええええ——ッッッ！！！」

獣は焦っていた。

気軽に初心者狩りに来て、自らが狩られる立場になろうとは思ってもしていなかったから。

獣は——私の首を狙って鎌を振るった。

反射的に・・・というか、本能で剣を盾にする。

ガキイイイン！！

刃と刃のぶつかり合う、甲高い嫌な金属音。

剣撃を受け止める事はできた。だが、レベル差があって衝撃までは捌ききれない。

たたらを踏んだ私を、獣は武器を強くぶつけて突き飛ばした。

私はそのまま、力任せに弾き飛ばされる。

「きゃッ！！！」

ダンッ、と背中が獣神殿の壁に叩きつけられた。

それだけで・・・私のHPは、ごっそりと削られる。

当然だ。私は本当に初心者だもの。

獣は鎌を構えなおし、ゆっくりとこちらに近づいてきた。

嫌な笑みを浮かべ、ゆっくりと、ゆっくりと。

怖い・・・！

力が抜けて、私の剣が手から滑り落ちる。

からん、と軽い音がした。

獣の鎌が迫る。焦らすように、ゆっくりと鎌首を上げて・・・

「~~~~ッ！」

思わず強く目をつぶった。

獣は焦っていた。

このまま狩られるよりは、狩ってやろと思った。  
一人を追い詰めた。

優越感に浸っていた。

獣には周りが見えていなかった。

だから気づかなかった。

すでに獣の仲間、その場に居ないという事に。

一閃ッ！！

私が目を開けたとき、そこには灰色の亡骸があった。  
さっきまで私を狙っていた獣だった。

そして、

「人の妹に・・・何しようとしてんだッッッ！！」

憤怒冷めやらぬといった表情の、紅い女性が立っていた。

\*\*\*

安心した。

安心して、ひざが崩れた。

「リリナ、大丈夫か！？」

へたり込む私を見て、ルーンは慌てたように私を支え起こす。

「リップス！」

志乃さんのスキルが、私の体を包み込んだ。

HPが、通常値まで回復する。

「あ、ありがとうございます・・・」

お礼を言おうと思って、私は志乃さんの方を見ようとした。  
その私の肩を、ルーンが激しく揺さぶる。

とことん揺さぶる。

かなり揺さぶる。

「大丈夫か！？怪我は！？怪我はないか！？」

本人は必死の形相で、私も今までこんな「ルーン」も「お姉ちゃん」も見たことがなかったからとても興味深く感じるんだけど。

だけどねルーン。やられてるこっちは結構目が回ります。

「ルルルルーン！？大丈夫、大丈夫だからちょっと止めて止めて！  
！」

「落ち着いて、ルーン。今リプスかけたでしょ？」

ルーンの慌てぶりに志乃さんはクスクスと笑う。

「あ、いやそうだけど！だが、だけど・・・！」

「大丈夫だってば、ルーン」

私は肩からルーンの手を下ろさせると、

「そりゃ、・・・怖かったけど」

小さく呟いた。

「大丈夫だよ。あれだけ強く追っ払ったんだから、しばらくは近寄らないと思う」

志乃さんはそういうと、不思議そうな顔でルーンを見た。

「・・・初心者、だって言ってたよね？」

「あー・・・」

「・・・あの強さは、どうしたの？」

ルーンはしばし志乃さんと、それから私の顔を見た。

何か思いつめてるような、何か思案しているような。

真剣な顔で少し黙り込む。

「ルーン・・・？」

私が声をかける。

「・・・話すよ」

やがて、何かを決意したような目でルーンは顔を上げた。

「リリナには約束してるし、志乃は信頼できる」

「・・・？」

志乃さんは疑問符を顔に浮かべていた。

私も、殆ど同じ状況だった。

「場所を変えよう。他のPCにはあまり聞かれない」  
ルーンはプラットホームを指差した。

「タウンでPTを組もう、話はそれからだ」

疑問に答えの終止符を――

私達は「△勇み行く 初陣の 夢の果て」を後にした。

## FILE 8：紅き戦士の力（後書き）

読者数500人突破しました・・・！応援してくださってる皆様方、  
ありがとうございます！

感想が励みになります！是非お願いします！

FILE 9 : Reveal the truth (前書き)

hackのネタバレを含んでいます。

黄昏と暁の娘御よ

全ては貴方が知っている

## FILE 9 : Reveal the truth

△サーバータウン マク・アヌ△

転送モーションの光が三つ、カオスゲートの前に現れる。

志乃さん、ルーン、そして私だ。

光が消え、私の視界が完全に開けた。

いつ見ても惚れ惚れするような、荘厳なドーム内。

どうしてだか今は、あまり興味がわかなかった。

「ほら、リリナ」

ルーンからのPT編成申し込みを受理する。

ルーンのスータス、そして数秒をはさんで志乃さんのスータスが表示された。

なるほど、確かに高レベルプレイヤーのスータスだ。

初心者PCなんかじゃ勝負にもならない。

「ルーン、そのスータス・・・」

志乃さんが呆然と呟いた。

実力は目の当たりにしていた志乃さんも、この数字には驚きを隠せなかったようだ。

高レベルPCの志乃さんより、ルーンのスータスは上をいつていた。

それを意に介さず、ルーンはカオスゲートに向き直る。

「志乃」

「？」

「一般PCが殆ど近寄らない、オススめのエリアはないか？」

私はルーンが「他のPCにはあまり聞かれたくない」と言っていたのを思い出す。

まだ初心者ワードしか持っていない私達は、他エリアへの入り口を作れないのだ。

「一般PCが近寄らない場所・・・」

志乃さんはしばらく思案顔になった。

そして、何かを思いついたように顔を上げる。

「・・・それなら、△隠されし 禁断の――」

「――!?」

一瞬、ルーンが息を呑んだように・・・私には見えた。

「――飛瀑。△隠されし 禁断の 飛瀑」

「――わかった」

3rdワードを聞いた瞬間、ルーンがどこかホッとしたような、何故か複雑な顔を見せた。

「・・・どうかした？」

志乃さんが首をかしげた。

「いや・・・なんでもない」

ルーンは首を振るのみだった。

ルーンの手が、カオスゲートに触れる。

さつき志乃さんに教えられたエリアワードを入力。起動。

私達の視界を、また光が飲み込んだ。

\*\*\*

△隠されし 禁断の 飛瀑△ アルケ・ケルン大瀑布

私は、光が消えて眼前に広がったその光景に息を呑んだ。

ドーム、マク・アヌ、草原エリア、獣神殿。

そんな、今まで見てきた全ての美麗グラフィックが、霞んで見えるような光景。

そこは明らかに――異質な場所だった。

私達が転送されたのは、橋のような建築物の上だった。円柱同士をつないで作ったような不思議な橋。

橋とはいえ、何処かへつながっている様子もない。

渓谷の中に立てられ、周りを深い崖に囲まれている。

しかし、私が目を奪われたのは目の前一杯に広がる滝だった。

円形を見せる、彫刻を施された建物を幾つも並べて創られたような壁。

その上から幾重にも別れ、ただ静かに流れ落ちる水。

その広大で神秘的な風景は、曖昧な空の色と飛び交う光の玉の中でより一層現実味を失っていた。

よく耳を澄ませばBGMですら、通常とは異なる異国の言葉で織られている。

「このエリアは・・・？」

私は呆然と呟いた。

通常エリアではない、それは初心者私でも分かる。

「ここはね、“ロストグラウンド”の一つ」

志乃さんは数歩歩きながら言った。

「ロスト・・・グラウンド？ “失われた大地”？」

「そう」

ルーンが呟く言葉に、志乃さんはうなずいた。

「ここはね、システム管理者にも手を出せない——仕様外のエリアなんだって」

「仕様外・・・って、そんなものが?!」

私は思わずあたりを見回した。

他のエリアよりずっと美しいグラフィックに見える。

BGMもエリアも、どう考えても一点ものの世界だ。

「ロストグラウンドは何箇所か見つかったんだけど、グラフィックもBGMもさまざまなんだ」

私の心を読んだかのように、志乃さんは笑った。

「しかも、ここでは何のイベントも起きなければ、モンスターが現れる事もない」

それでは・・・ゲームとしてのこのエリアはまるで無駄ではないか。

「システム管理者が・・・CC社が、そんなエリアを作ると思う？」

「・・・思わない、な」

「だから此処は、謎なんだ」  
ロストグラウンド

志乃さんは歩き続ける。私達も着いて歩く。

「何か大切な話をするときには、便利な場所でしょ？」

普段は私と私の所属するギルドのギルドマスターとの連絡場所なんだけど。

志乃さんはそういつて足を止める。

さほど長い時間ではなかったのに、橋の終わり・・・淵まで辿り着いていた。

「さ、ここなら一般PCは殆ど訪れないよ」

「・・・」

ルーンはしばらく、無言だった。

そんなに喋りにくい事なのか、と思ってルーンの顔を覗き込む。

ルーンはぼんやりとこの世界を眺めていた。

「ここは・・・」

呟く言葉。その瞳に複雑なものが映る。

「ここはね、システム管理外のエリアのほかにもう一つ特徴があるの」

それを見透かしたかのように、志乃さんは口にする。

「？」

私はルーンのほうを見た。

ルーンは遠く、流れ落ちる滝に目をやりながら、呆然としていた。

志乃さんはルーンを真っ直ぐに見つめ、囁いた。

「ここは——ロストグラウンドは、R1の頃から存在してるんだっ

て」

「え・・・？」

私は呆然と呟いた。

同じ「The world」とはいえ、R1とR2は、殆ど名称だけを受け継いだ別作品になっている。

R2はPKシステムの解禁により、その世界の雰囲気を変えてしまったのだ。

それに加えてR1のキャラの引継ぎ不可などのシステム問題もあり、R1プレイヤーの多くはR1消滅と共に引退した。

だからR1とR2は模造品どころか全くの別作品。

プレイヤーの雰囲気一つ取ったところで全く別のゲームなのである。だが、この奇妙なリンクはなんだ。

R1でもタウンとして存在していたマク・アヌの様に、システム管理者が用意した前作とのリンクではない。

そのシステム管理者ですら手を触れることの出来ないこの繋がりとは一体。

「・・・やっぱりか」

ルーンがポツリと呟いた。

「R1の時に、ここに来たことがあるんだ・・・」

ルーンは崖のふちに座った。足を下に投げ出し、風景を見る。

瞳が揺れていた。

溢れ出る懐かしい思い出と、そこに今居るといふありえない事に対して、少し混乱しているのかもしれない。

「・・・そうなんだ」

志乃さんは離れたところに立っていた私を手招きし、ルーンの隣に座った。

私も習って横に座る。

しばらく、静かに流れる落ちていく水の音と、異国の歌が耳をふさいだ。

\*\*\*

「・・・話の前に、ちょっと昔話をしていいか？」

どれくらい経ったか・・・ルーンはポツリと呟いた。

「昔話？」

私が聞き返すと、ルーンはうなずいた。

「——私がここに初めて訪れた時の話」

「・・・うん、私は構わないかな。ルーンの話、聞きたい」  
志乃さんが穏やかに言った。

「・・・私も、聞きたい」

私の了承の言葉を得てから、ルーンはとつとつと語りだした。

「私は二人の友人がいた。英雄と呼ばれていた彼らと私は、それなりに名の通った高レベルプレイヤーだった」

R1時代の出来事——

私と志乃さんは黙ってそれに耳を傾けた。

\*\*\*

「ある日、彼らと私はThe worldで噂されるようになった  
謎の事件の調査を始めたんだ」

世界を愛する者として。そういう気持ちだった。

「その最中、一人が自分の友人をゲームに誘った。その友人のサポートの手伝いに、私も誘われた」

昔語りは続く。

「ところがそこで一つの事件が起きた。それを境に、彼は世界に帰ってこなくなった」

“ 帰ってこない ” とあえてルーンは言った。

でも私はその意味に気づくのはそれからずっと経ってからの事となる。

「友人は世界に彼を連れ戻したかった。私もその事件を見ていた当事者の一人だったから、彼に協力することにした。途中で女戦士が仲間になって、三人でな」

だけだ。

「もう一人の方が、彼が帰ってこなくなったのは友人の所為だと言  
い出した」

彼は剥き出しの感情で、「友人」にぶつかりはじめる。

「友人」はただ、親友を取り戻したいと思っただけなのに。

「友人」が行動を起こせば起こすほど、おかしい事が The world に起こっていく。

「友人」には彼なりの思いがあった。その為に行動を止められなかった。

その行動ゆえに、彼の怒りは収まらなかった。

二人の目的は一緒だったのに。彼を連れ戻そう、助けようと思って  
いたのに。

そして英雄の一人と英雄の友人の間は、悲しいまでに深いすれ違い  
が起こっていった。

「——私はどうしたらそのすれ違いを正せるか、分からなかった」

外れたピースを埋めようとして、別なところを崩してしまうような  
どちらも真摯な思いを持っていたから、すれ違ったのだ。

「悲しくて苦しくて、私は一人で適当に組んだエリアに飛び込んで  
泣いた」

そして気がついた。高レベルプレイヤーだった自分は、

英雄と呼ばれていい気になってるただの子供だったのだ。

些細なすれ違いから出来た仲間の溝を埋める事すら出来ない英雄な

ど。

そんなもの、英雄でもなんでもない。

「ここで泣いて泣いて、私はやっと立ち上がった。おだてられた子供じゃなくて――」

――英雄になろうと決めた。そう誓った。この場所で――」

\*\*\*

長い語りを終えて、ルーンは息をついた。

「もう、七年くらい前になるがな。比喻表現でもなくあの時の私は本当に子供だった」

そして、やっと笑う。

「今は全員の誤解も解けてるし、“彼”も帰ってきた。私達が調査していた事件も解決した。R1がなくなった今も、彼らとの連絡のやり取りは続いてるよ」

「そんな事があつたんだ・・・」

私は、ルーンがR1で体験した出来事など殆ど知らなかった。楽しかった、嬉しかった、英雄だった。

そんな事を笑顔で話すお姉ちゃんしか知らなかった。

ルーンは、「榎本響」はゲームの中で成長していたのだ。

私は、ルーンとお姉ちゃんの強さの秘密を垣間見たような気がした。

「・・・不思議、だね」

志乃さんは率直な意見を述べた。

「もう二度と来れない筈だった誓いの場所に、居るなんて」

「ああ。正直、何でもこんな事が起きているのか分からない」

ルーンは飛び交う光の一つに手を伸ばす。

右手にはめられた金色の指輪が、光に照らされて美しかった。

「時代は変わった。R1は終わって、私が色んな事を共にしたPCは消えた」

ルーンは立ち上がった。

「・・・はずなのに」

自分の手のひらをまじまじと眺めながら。

「何も・・・あの時と変わっていない」

「・・・変わって、ないって・・・？」

「・・・」

志乃さんは黙ってルーンの言葉を待っていた。

「私は・・・私のPCは・・・“ルーン”は、まるでロストグラウンドみたい・・・」

ルーン・・・いや、お姉ちゃんは告白した。  
自らの身に起きた、謎の答えを口にした。

「私は、R1と一緒に消えたはずのルーンは今——」

ルーンは右の手で胸の辺りを強く抑えた。

右手にはめられた指輪が、光を反射して鈍く輝いた。

「——ここにいる・・・..!」

## FILE 9 : R e v e a l   t h e   t r u t h (後書き)

本日、閲覧者が625人に到達いたしました！  
ひとえに皆様のおかげです！ありがとうございます♪

FILE10:LostPerson(前書き)

・hackシリーズのネタバレを含んでいきます。

喪われし者、長い年月を経て再び地に戻らん

故にそれは夢物語

## FILE 10: Lost Person

ぼんやりとしていた。

いや、呆然とか唖然とか言うのだろうか。

私がその言葉を理解するには暫し時間がかかった。

「えっと、つまり・・・？」

「そのPCは、R1時代に使っていたPC・・・って事？」

私の言葉を引き継ぎ、志乃さんが簡潔にまとめてくれた。

「そうだ」

ルーンは肯定する。

「そもそもこれに気がついたのは、R2を始めた日・・・一昨日だな」

二人でキャラエディットをしたあの日――。

ルーンの話 요약するとこうだ。

あの日。新しいキャラクターを、R1の時と同じ“ルーン”というPC名にしようとした時の事。

「そのPC名は既に使用されています」という表示が現れた。

“ルーン”はR1では有名なPCだったから、マネをしたPCが居たのかもしれない。

だがお姉ちゃんは、一種の“不思議な予感”に駆られたらしい。

「不思議な予感・・・？」

志乃さんが尋ねるが、ルーンは曖昧に笑って「私は普通のPCじゃなかったからな」と小さく呟くにとどめた。

私がこの言葉の意味に気づくのは、まだ先の話になる。  
話を戻す。

予感に駆られ、お姉ちゃんは私を先にログインさせた。

そして、自らのキャラエディット画面を終了させ、登録済みのプレ

イヤー用のログイン画面に移動した。

R1で馴染んだPC名を入力する。

“ルーン”

R1で使ったパスワードを入力する。

“\*\*\*”

震える手で、ログインボタンを押した。

その次の瞬間には——“ルーン”は、新しい“The world”に降り立っていた・・・

「——そういうわけだ」

ルーンはそういつて、手を広げた。

「まさに、ロストグラウンドみたいだろう？」

そう、まさに“失われた者”だ。

名付けるとするなら——“ロストパーソン”とでも言うところか。

「R1時代のPCがそのまま・・・」

興味深げに呟く志乃さん。ルーンをまじまじと見つめながら、

「装備品とか、アイテムもそうなの？」

「ああ・・・まあ、今も残っているような基本的な回復アイテムしか持っていないけどな」

ルーンは後ろに手を回し、無の空間から自らの槍を引き出した。

古びた金属製の槍は、よく見れば美しい装飾の施された荘厳なものである。

銅のような色合いの、それでいて何故か不思議な光沢を放つ金属は、もしかしたら究極の魔法物質と言われるオリハルコンを模しているのかもしれない。

私は公式HPの世界観を詳しくは読んでいないから、“オリハルコン”という物質の概念が“The world”に存在するのかなど全く知らないが。

「少なくとも装備品は間違いなく世界に一つしかない」

そんな私のとりとめのない考えなど露知らず、ルーンは槍を一閃し

た。

「？」

疑問符を浮かべた私と志乃さんに、ルーンは何処か誇らしげに微笑む。

「私の鎧とアクセサリ、それに武器はR1での限定イベントのクリア報酬なんだ」

ルーンが言うには、期間限定の上“先着1パーティー”のみがクリア可能という、高レベルプレイヤーの為の難関イベントだったらしい。

「私は一人でクリアしたから、クリア報酬の三つのアイテムを一人で手に入れたんだ。だから装備品は世界に一つ、私の持っているものしかないはずだ」

そう言うてルーンは、自らの長く紅い髪を一つに止めている髪飾りを指差した。

動くたびに金属が擦れたようなシャランという音を立てる、蝶の形を模した金色の髪飾りだ。やはり何処か古びた、年代を感じさせる様相を持つ。

鎧にいたっても同様だ。月日を経て良い具合な色合いを持つ皮を、不思議な輝きを持つ金の糸で縫い上げてある。

「確かに、R2では見たことのない装備だね」

志乃さんは頷いた。

「これは、私が英雄であるという証なんだ」

ルーンは槍を掲げた。ちょうど近くを通った光を反射し、幻想的にきらめく。

「でも、それにしてもありえない事・・・だよな？」

誇らしげな顔のルーンに、私は恐る恐る言った。

「そうだ、ありえない事なのだ。新世界になった「The world」に根本的に起こりえない事態なのだ。」

「だってR1のデータは全部消えちゃったんでしょ？」  
消えたデータは戻ってこない。

R1の終焉に、自らのPCが消えてしまうことに泣いた人は数多く居た筈だ。

「消えちゃったのに、何でルーンだけ・・・？」

何故ルーンのPCデータのみは、R2に受け継がれているのだろう。その瞬間——ルーンはふつと真剣な顔になり、小さく何かを呟いた。

「・・・私だけじゃ、ないはずだ」

それは、流れ落ちる滝の音にかき消されて聞こえなかった。

「え、今何て・・・？」

「・・・いや」

ルーンは首を振って、なんでもない、と笑った。

「この世界におわす女神様が、助けてくれたのかもなって言ったのさ」

「女神様・・・？えつと」

私は目を通したただけの世界観を必死に思い起こす。

確か・・・この世界の歴史では、女神を人族が八本の鎖で繋ぎグリーマ・レーヴ大聖堂の中に閉じ込めたという設定があったはずだ。名前は、なんと言っただか——

「・・・A u r a——」

ふいに。

あらぬ方向から、その声は聞こえた。

「——誰だッ!？」

私達が一斉に振り返る。

そこに一人の“異形”のPCが居た。

青い髪に色のついた眼鏡をかけ、長いマフラーを巻いた人族の男性PC。

それだけなら普通のPCだ。

だが彼を普通という人は絶対に居ないだろうと初心者私でも分かる。

彼は“異形”のPCだった。ルーンとはまた違う異形である。

異形の元は、その左腕。

その腕は全てを巨大な拘束具に包まれ、もはや一部もその原型を晒してはいない。

そんなキャラクターエディットは不可能なはずで、それ故に異形の烙印を人の脳裏に焼き付ける。

「悪いとは思ったが、興味深かったので話は聞かせてもらった」  
男はこちらに向かって歩み寄る。

只者ではない雰囲気、私とルーンは身構えた。  
「そんなに構えるな、・・・別に敵じゃないさ」

男は薄らと笑みを浮かべた。

だがその雰囲気と異形の左腕が原因で、全く安心できない。

「・・・志乃。俺を紹介してくれ」

それを感じ取ったのか、男は志乃さんに視線を据える。

「わかった」

「・・・え？」

私も隣に居る志乃さんに視線を向けた。

ルーンも目を丸くしていた。

「知り合い・・・なのか？」

「うん。だから、警戒しなくても大丈夫」

志乃さんは安心して大丈夫、と笑んだ。

その笑顔を見て、私は体から力を抜く。

「彼は私の所属するギルドのギルドマスターなの」

「ああ、そういえば連絡用にここを使っているんだっただな」  
ルーンが納得する。

志乃さんは男の横に並んだ。

「彼の名前は――」

後にこの出会いが、大きな転機を迎えるなどと誰が感じただろう。  
既に運命の歯車は廻り出したのだ。

時計の針は戻らない。

ならば――

「――オーヴァン」

ならば――進めるのみ。

これが果たして当初から彼の歯車に組み込まれていたのか。  
それとも女神の悪戯か。

そんな事、このときの私には分からなかった。

## FILE10:LostPerson(後書き)

更新が遅くなつてご迷惑をおかけしています。

ペースを取り戻せるよう頑張りますので、応援よろしくお願い申し上げます。

感想等ございましたら気軽にどうぞ！

## FILE 11：誘いと決断（前書き）

・hackシリーズのネタバレを含みます。

決めて、自分の行く末を

決めて、自分の行動を

認めて、自分の運命を

## FILE 11：誘いと決断

私はM2Dを外し、ふうと息をついた。

初めて尽くしで色々あった今日も、気づけば終わろうとしている。初めてエリアに入った。初めてモンスターと戦った。初めて志乃さんに出会った。初めて宝箱を開けた。初めて装備を切り替えた。初めてPKに襲われた。初めてロストグラウンドを知り、初めてルーンの正体を聞き、

そして初めて――オーヴァンに出会った。

私の視界に映るのは自分の部屋の代わり映えない風景だけれど、私の脳裏はまだ「世界」が色濃くその存在を主張する。

そこで自らが受けた疑惑、疑問、喜び、嬉しさがない交ぜとなった不思議な感情が胸の奥に貯まっている。

耳に残るのは、あの異国織りの歌と滝の音、そして会話する四人の声――

\*\*\*

「オーヴァン。こっちはルーンと、リリナ」

「よろしくな」

「よ、よろしくお願いします・・・」

「ああ、よろしく」

互いにそののない紹介を終えると、志乃さんは申し訳なさそうに頭を下げる。

「ごめんね、ルーン」

「ん？何がだ、志乃」

「オーヴァンが話、聞いちゃったこと」

そういえば、他の一般PCに話を聞かれなかったためにわざわざロストグラウンドにやってきたのだったと、私は今更になって思い出した。  
「ああ、そのことが」

ルーンは合点がいったと言わんばかりに頷いた。

「あまり人が来ないところを選んだつもりだったんだけど・・・」  
「気にするな、志乃。オーヴァンなら一般PCに私の事を言いふらさないだろ」

ルーンはそれから、さらりと事も無げに言った。

「というか、オーヴァンは“一般”PCには見えない」

「ちょ、ルーン・・・」

私は慌てた。確かにオーヴァンは一般PCではありえない姿をしては居るけれど、まさかそれをすっぱり言うなんて・・・。  
それを完璧に気にしないで、ルーンは続けた。

「私は最近の掲示板はチェックしている。オーヴァンの噂は時々書き込みされてるだろう」

「ああ・・・書かれる事は多いな。あまり気にとめてはいないが」  
オーヴァンは、どうやら気分を害しては居ないらしい。良かったと少し息を吐く。

そして安心すると、好奇心が頭をもたげてくる。

「・・・ねえ、一体どんな事が書き込みされてたの？」

ルーンに尋ねると、ルーンは顎に手を当て、記憶を探るように言った。  
「・・・まずその左腕の話。眉唾物の噂ばかりなんだけどな。チー

トだとか限定PCとか特別なクエストの報酬だとか・・・あとGM  
なんじゃないかって言うのもあった」  
ゲームマスター

「え・・・」

私は一瞬、顔がこわばるのを感じた。  
だってGMだったら、“ありえない現象”の元にここに存在しているルーンを、バグとして削除しかねない・・・。  
オーヴァンはふっと口元を歪ませた。

「安心しろ。俺はGMじゃないし、管理者に訴えるつもりもないさ」  
「・・・あう・・・はい」

・・・そんなに私の考えは表に出るのだろうか。  
自分に疑問を持つ今日この頃である。

ルーンはすこし笑いを堪えてから（肩が震えているので多分笑ってた）、真面目な顔で話を続けた。

「他の噂というか——基本的に他のPCはお前を“変人”と称しているようだな」

「へん・・・じん？」

「詳しい話は知らないが、ギルドを立ち上げて“何か”をずっと探してるっていう——」

そこで顔を上げたルーンは、

「私の話を聞いたんだろう？ だったらそっちの話も聞かせてくれな  
いか？」

悪戯っ子のような笑顔を浮かべていた。

オーヴァンはというと、そんなルーンを眺めている。

何を考えているのかは分からないが、何かを真剣に考えている・・・  
否、思い出しているような感じには見えた。

「・・・俺達のギルド名は“黄昏の旅団”、目的はあるアイテムを  
探し出す事だ」

しばしの逡巡の後、オーヴァンの唇から漏れたのは、そんな言葉だ  
った。

「・・・あるアイテム？」

ルーンが首を傾げ、続きを促した。

「・・・“Key of The Twilight”」

その名は、志乃さんの口から告げられた。

「——」

一瞬、ルーンが言葉を詰まらせる。

「“Key of The Twilight”・・・？ 黄昏の鍵  
？ 何ですかそれ？」

「この世界に存在すると長らく言われ続けてきた幻のアイテムだ。あらゆる願いを叶える万能のアイテムだと言う者もいるが、真偽は不明」

オーヴァンが低い声で説明した。

「形状もまた不明だ。もちろん攻略本にも載っていないし、仕様にも存在しない」

また“仕様外”だ。まだ初めて二日目で、こんなにも多くの“仕様外”を見た。

自分はこの世界の不思議な部分全てに関わる運命にあるのではとすら思う。

「噂自体はR1時代から続いてるんだって」

志乃さんがオーヴァンの補足をする。

「時にヒトの形を取り、時に腕輪の形を取り、その世界に存在する——らしい」

その時、オーヴァンがチラリとルーンを見た気がする。

ルーンは・・・何故か右手を押さえてうつむいている。

その手にはめられた金色の指輪が、一瞬輝いたような気がした。

そんなルーンを見つつ「一種の都市伝説のようなものだ」と、オーヴァンは笑う。

「“らしい”って・・・どんなアイテムだが、そもそもあるかどうか分からないのに、探すんですか？」

私の疑問は、自分で言うのもなんだがもつともだと思う。オーヴァンが変人と言われる所以も分かる気がする。

有るかどうかも判らないアイテムを探す。

そんな荒唐無稽な目的で作られたギルド、それ自体が既に「変わり者」だ。

そんな疑問を持った私に向かって。

「・・・Key of The Twilight」は、ある」

そんな私に向かってその“変わり者のギルドマスター”が言ったのは、

たった一言の簡潔な言葉だった。

「・・・というより、“ある”という前提でこのゲームを遊ぶ」  
それが、黄昏の旅団という変わったギルド――

「志乃さんも、“黄昏の旅団”に入ってるんですね？」  
私の質問に、志乃さんは微笑を絶やすことなく頷いた。

「志乃には俺が不在の間代理で指示を出してもらったり、俺との連絡係になってもらっている」

ギルドマスターの代理って・・・

「もしかして志乃さん、ギルド内でかなり高い立場なんですか？」  
志乃さんは首を振る。

「高い立場とか、ないよ。人数も少ないし」

話によると、つい最近二人のPCが旅団を抜けたらしい。

「だから今は三人。・・・いや、もうすぐ五人、かな」

「もうすぐ？」

「入団候補者が居るの。リリナよりも少し前に始めたばかりの初心者の子が、二人ね」

「へえ・・・そうなんですか」

五人でも・・・やっぱりこじんまりとしたギルドという印象は拭えなかった。

ギルドが主に行っている事が既に不可思議ではあるから、もしかしたら当たり前なのかもしれないが。

いきなり、穏やかな微笑の志乃さんが一瞬驚いた顔をした。

隣のオーヴァンに視線を送り、オーヴァンが頷くのを確認してから志乃さんは視線を私達に戻す。

ウィスパ―機能を使つての会話をしているようだった。二人の会話

は私達には聞こえない。

視線を戻した志乃さんは開口一番、

「リリナ達は、興味ない？」

出し抜けに質問され、私は思わず首を傾けた。

「・・・へ？」

「興味ない？ “Key of The Twilight”に」

志乃さんは繰り返した。

「興味・・・ですか？」

「よかつたら、二人に旅団に来て欲しい」

オーヴァンが志乃さんの言葉を引き継ぐ。

「・・・私達に、か？」

ルーンの問いに、オーヴァンは頷いた。

「強制はしない。ただ、考えて欲しい」

私は暫し思考した。

「私は・・・興味ない、と言ったら嘘になります」

元々、ファンタジーや謎は大好きだ。ゲームを始めるまでは、一番好きなものはと聞かれたら「空想世界」と間髪いれずに答えただろう。

今はThe worldに完全に心奪われてはいるが、元来の謎好きファンタジー好きは変わっていない。

だから、謎のアイテム“Key of The Twilight

”は私にとって気になる存在ではあった。

「隠された謎、とか伝説とか。そういうのは凄く好きですから」

私は正直な胸のうちの、キツパリと明かす。

「本当？ だつたら、嬉しいな」

志乃さんがふわりと微笑んだ。

志乃さんは大人びた優しさと、どこか人を和ませる雰囲気を持った人だ。

そしてオーヴァンは、人を惹きつける雰囲気をもし出すミステリアスな人だ。荒唐無稽なギルドをその不思議なカリスマで束ねる謎

の男。

このギルドは確かに変わり者だけれど、強く私の心を惹きつけた。ここだったら、私は楽しくやれるかもしれない。

初めてこの世界で信用した志乃さんの存在も大きかった。

信頼できる人達と、ルーンと、皆で幻のそれを探すのもまた、面白いかもしれない。

見つからない可能性のほうが高いだろうけど、それはそれだ。

「ねえ、ルーン……」

黄昏の旅団、入ろうよ。

私がそう言おうと口を開いた瞬間だった。

「……私は、興味ないな」

ルーンの口から、意外な言葉が漏れたのだ。

「え？」

私は驚いた。

「Key of The Twilight”……仕様外のアイテムなんて、興味ない」

ルーンは畳み掛けるようにもう一度言う。

「大体、手に入れて何をするんだ？何を願うんだ？レベル？レアアイテム？ゲームの根本を覆すのか？女神様にでもお会いするのか？」  
ルーン言葉は次から次へとあふれ出る。

「この世界を普通に楽しんでいる人たちが居る。もし“Key of The Twilight”を見つけたとして、その力でデータが改変されてしまったら？バグが発生してしまったら？」

それはもう、溢れとどまる事を知らない。

「Key of The Twilight”を使うたびに、何処かにほころびは出るだろう。それだけ強大な力を持つアイテムなんだろ。もしそれが原因でThe worldが運営出来なくなったら？消えてしまったら？どれだけの人が嘆く、R1が消えたとき

のように!？」

ルーンはだんだん加熱していく自分に気づき、悪いと一言だけ言って息をつく。

「・・・それに、ギルド加入はしたくないんだ。心に決めたメンバーが居るんでね」

ふつりと、ルーンは黙った。

そのいきなりの激昂に、私は何も言えずに呆然としていた。

たかが・・・と言ってしまえばそれだけだけど、The worldというゲームの中の、都市伝説のようなアイテムの話だ。

そんな空想のアイテムの話題に、どうしてルーンがここまで本気で語るのか私には分からなかった。

それにルーンの言っている言葉。

まるで“Key of The Twilight”がR1を消してしまったのかのようにも聞こえるし、“Key of The Twilight”という存在をあたかも知っているかのような意味合いにも取れた。

「・・・そうか」

オーヴァンは殆ど表情を変えなかったように見える。

眼鏡が光を反射し、あまり表情を見ることが出来なかった。

志乃さんといえば・・・少し、残念そうな顔をしていた。

「・・・リリナ、お前は入りたいなら入ってもいいんだぞ？」

ルーンは言うが、私は冷静なルーンの言葉を聞いて、逆にうるたえた。

「・・・すみません、志乃さん、オーヴァンさん。私の入団は・・・保留にしてもらえますか？」

結局、私の結論はこうなった。

今のルーンの激昂を見たから。ルーンの横で入団するなどとは言えなかった。

そしてそんな気分にも、なれなかった。

「・・・わかったよ、リリナ」

志乃さんもそれは感じてくれたらしく、軽く頷くのみだった。

「・・・リリナ、もうすぐ日付変わるぞ。そろそろログアウトしよう」

ルーンが呟いた。

「え？もう、そんな時間！？」

戦ったりレベル上がったり襲われたり、色々あって時間が経つのを忘れていた。

「そっか。私達はまだ、居るから」

志乃さんが言う。

「入団の件はあんまり気にしないで。気軽にPT誘ってくれて構わないから」

「それは助かる。R2では私もリリナも初心者だしな」

ルーンはそこで、やっと笑顔を見せた。

「私が忙しくなったら、リリナ一人になってしまっから」

初心者ソロプレイの恐ろしさは、今日のPK集団で経験済みだ。

「その時は、志乃さんに頼りますね！」

私も笑顔になる。さっきまでの重苦しい雰囲気は消えていた。

笑顔にはやっぱり魔力があると、私は思った。

「それじゃ、またな」

ルーンがプラットフォームに向かう。

「志乃さん、オーヴァンさん、今日はありがとうございました！」

私もルーンの背を追った。

\*\*\*

ログアウトしてM2Dを外した響は、小さく息をついた。

“Key of The Twilight”。

あの事について、自分が予想以上に熱くなってしまった事に後悔す

る。

（それでも・・・興味本位で、Key of The Twilight  
ghtに近づいて欲しくない）

自分は知っている。“Key of The Twilight”  
が深く関わった戦いを。

力を使われたものは危険な目にあつた。力を使ったものも危険な目  
にあつた。

それだけ強い力を持つものだということは、自分がよく分かっている  
つもりだ。

興味本位で追いかけていた者が、深入りしすぎて大変な事になった  
りする。

その可能性を否定する事は出来ないのだ。

それに、恐ろしいのは“Key of The Twilight”  
”の持つ力だけではない。

その力故に生まれてしまう反存在もまた、恐ろしいのだ。

（今のThe worldまで危険にさらしたくない——）

R1が何故消えてしまったのか、響は知らない。

ニユースで放映されてる建前など信じちゃいけないのだ。

あれは隠蔽好きのCC社の息のかかった情報なのだから。

原因はゲーム内にあると思っている。そしてそれがゲーム内での問  
題なら、まず間違いなくそれは関わっているのだ。

（守りたい。世界を。鈴菜と一緒に楽しんでる今のThe worldを——）

女神はそのために、私のPCを守ってくれたのではないだろうか？

何故今の世界が荒れているのか、響は知らない。

女神が世界に愛想をつかして消えたのかもしれない？

それでも、自分のPCがあることが女神の存在を暗に示してる。

女神は居るのだ。まだあの世界に。

だとしたら、他にも——。

響は携帯を取り出した。一斉送信でメールを送る。

「共に戦った仲間達へ。“世界”のことにについて、話がしたい――」

\*\*\*

二人が去った後のアルケ・ケルン大瀑布に、志乃とオーヴァンは立っていた。

「・・・断られちゃったね」

志乃が呟く。

いきなりウィスパーでオーヴァンが言ったのは一言。

『二人に、入団の誘いをかけよう』

志乃はすぐに返信した。

『この二人も、入団候補者なの？』

それを聞いたオーヴァンは頷いたのだ。

だが、誘いをかけても二人は入団しなかった。

「妹の方は、興味深げだったじゃないか」

「でもルーンは、入団する気はまったくなさそうだよ」

すっぱりと切り返す。

「彼」の時も最初に断られた。けれど、後に「彼」は入団した。

そして志乃はその予感を感じていた。

けれど今回は。ルーンは、絶対に加入しないのではないかと思う。

女の勘だ。確証はない。けれど志乃は、自分の勘を外す事は滅多にない。

志乃が言い切ったということは、きっとそうということなのだ。

しばらく、沈黙が流れた。

「・・・あの二人を入団させる」

オーヴァンはそれだけ呟いた。

謎の現象により、消えたはずのPCで世界に降り立ったイレギュラ

ーなPC、ルーン。

そしてその妹であるリリナ。

オーヴァンは、二人に何を感じているのだろう。

志乃はそれが聞きたくなつた。——けれど、それを言葉に出す事はなかつた。

「・・・わかつた」

志乃はそれだけ返事を返すと、振り返つて風景を見やる。

幻想的な風景の滝の音と、異国言葉の美しいメロディがどこまでも響いていた――

## FILE 11：誘いと決断（後書き）

総読者数： 1198 というとんでもない数字になりました！  
更新が遅いの、こんなに応援していただけ・・・！  
頑張ります！感想などがありましたら是非お願いします！私の動力  
源です！！

**FILE 12：思考・邂逅・英雄達（前書き）**

軋む音が聞こえるかい？

再びに時が動きだし

狂った歯車は暴走する

君に捧ぐ、そんな戯曲のプレリユード

## FILE 12：思考・邂逅・英雄達

響は返事を待っていた。

返信待ちなのはあと一人。連絡を入れた四人のうち、三人の男からは返事が帰ってきた。

特にあの勇者の反応は素早かったなと思い出す。「・・・The worldで何かあったの？」とだけのメールもこれまたシンプルすぎて彼らしいといえば彼らしいと笑った。

それはともかく。あと一人の返事を響は待っている。

突如、携帯が軽やかなメロディを刻む。白い携帯につけられた、爽やかな青さのクリスタルビーズのストラップがバイブレーションで小刻みに震えてカタカタと音を立てる。

本体表面につけられた小さな画面に、発信元の名前が表示される。

「――」

来た。表示された名前を見て、響は微笑んだ。

携帯を開き、通話を開始する。

向こうの声が聞こえる。前に会った時と変わらない声。思わず笑みがこぼれる。

当たり障りのない挨拶をして、当たり障りのない世間話をする。

機械の向こうから、笑い声がする。そして向こうにも、笑う響の声が聞こえる。

しばらくお互い楽しく会話して、そして本題。

向こうは真剣な声に変わり、メールの内容について問うた。

こちらも真剣な声で、世界で起きる謎について説明した。

困惑。当惑。驚き。声に混ざる色は、視覚に映ればきつともややもした濃い紫。

やがて――向こうは何かを覚悟するような、静かな声音になる。

響は頷いた。近くにあったメモを取り、ペンを滑らせ日付をメモする。

日取りは決まった。多分他の皆も大丈夫だろう。  
どうしても確かめなければならぬのだ。女神の意図を。

それが、あの戦いに深く関わった英雄達の使命。  
響は電話の向こうに向かって笑った。

「それじゃ、約束の日に。またね・・・晶良」

\*\*\*

ログインして顔を上げると、白い呪癒士の女性が柔らかな微笑をたたえていた。

「志乃さん、こんにちは！」

「こんにちは、リリナ」

挨拶を交わすと、志乃さんからのPT編成希望の要請が届く。

受理してPTを組むと、志乃さんはカオスゲートに向かって歩き出した。

「今日はどこに行く？」

「草原エリアがいいです！見通しもいいし」

「そっか。じゃあΔサーバーの・・・」

私達はエリアに向かうべく、カオスゲートを起動させた。

初めて志乃さんに会ってから、二週間ほどの時が過ぎた。

私はルーンと志乃さんにサポートされながら、Lv上げを中心に活動していた。

二人が揃っている時は自分のLvとは格上のエリアに連れて行ってもらうこともあり、同時期に始めた初心者よりは格段にLvが上がっていた。

始めた頃の頃よりもバトルには慣れ、レンゲキや覚醒といったR2から増えた特殊スキルについてもある程度使いこなせるようになった。

ゲーム上での“死”も体験したし、PKに襲われる事もまだあった

けれど、それでも私は心からThe worldを楽しんでいた。ルーンと志乃さんと私の三人でエリアを攻略したり、街中を歩いたり。

志乃さんもルーンもそれぞれにやることがあるので、毎日一緒というわけにはいかなかったけど——それでも一緒に居る時は、心底楽しんだ。

ところがここ一週間程はルーンは別行動を取り続けている。

どうしたのかと尋ねれば、ロストグラウンドを調べているのだと返された。

自分のPCに起きている謎の現象の解明の為、だそうだ。

手伝おうかと言ったが、「お前はLv上げに勤しんでおけ」と切り替えられては何もいえなかった。

そんなわけで私は最近志乃さんと二人で活動する事が多い。

二人で居る間、私は今のThe worldの情勢や情報についてなどを志乃さんに教えてもらったりした。

例えば三大ギルドと呼ばれる巨大な構成人数を誇るギルドの話。

The worldに平和をと掲げ、PKの廃止を訴える「月の樹」。

楽しければなんでもよしという放任主義故にPKの巣窟となっている「ケストレル」。

そしてゲーム内における市場をほぼ掌握している商業ギルド「TaN」。

巨大ギルドには特設エリアが与えられる事、近々「TaN」がそのエリアを与えられる事。

「月の樹」と「ケストレル」はその理念のすれ違いゆえによく衝突が起こっている事。

「TaN」はかなり大型の商業ギルドであるものの、その裏の黒い噂も絶えない事。

志乃さんが語るThe worldは決して平和的なものとは言えないものが多かった。それが今の世界の現状を端的に示している。

だが、決してプレイしているのはマナーの悪い人やPK目的の人達だけではないということも志乃さんは示していた。

ルーンが居ると気まずくて出来ない、“黄昏の旅団”の話をすることもあった。

黄昏の旅団の目的はもちろん“Key of The Twilight”だが、それを探す過程の中でロストグラウンドを発掘する事もあったらしい。オーヴァンの存在と不可思議な目的もそうだが、そんな事があったからこそ“黄昏の旅団”は有名であるそうだが、しかし、ロストグラウンドを見つけたところでそれは求めているものではなく。

“Key of The Twilight”の手がかりは得られず、団員は減り、“黄昏の旅団”は段々と停滞状態にあったらしい。つい最近までは。

さくさくと音を立て、草原を踏み分け歩く。

風が吹いて揺れる髪は、黄昏時の太陽に紅く照らされていた。

そんな中、私と志乃さんはフィールド攻略を進めながら話す。いつものように。

「今日もルーンはロストグラウンド？」

志乃さんが尋ねてくるので、私は首を振る。

「今日は現実<sup>リアル</sup>で出かけてます。古い仲間と会ってくるって、俗に言うオフ会というやつだ。」

「そうなんだ。・・・仲間といえば」

志乃さんは何か思い出したように言った。

「前に言ってた二人、ちゃんと入団決まったんだよ」

「前に言ってた二人・・・ていうと、あの私よりも少し前に始めたっていう？」

「そう」

どうやら「もうすぐ」は実現し、旅団の構成人数は五人になったらしい。

「Key of The Twilight」の手がかりの方も、きつともう少し。情報が少しずつ集まってきたの」

志乃さんは嬉しそうに笑っている。

「そうなんですか・・・」

いいなあ、楽しそうだなあと思う言葉は胸の奥にしまっておいた。姉が目の前であんな事を言った手前、入団したいとは中々言い出せなかったのだ。

都市伝説の一種とされる伝説のアイテム。そしてそれを真剣に求めるギルド。

気持ちは大きく傾いているのに、そこに踏み出すことが出来ないのはもどかしい気持ちでもあった。

「どうして、ルーンはあんなに嫌がるのかな・・・」  
思わず口にする。

志乃さんが隣で首を捻る。

「どうしてだろうね・・・“Key of The Twilight”に、何か嫌な思い出でもあるのかな」

しばらく二人で唸ってみたけれど、やっぱり思いつかなかった。

ルーンの過去が関係しているなら、R1をプレイしていない私達にはルーンの心の内は到底計り知れない。

「・・・“Key of The Twilight”、か」

ルーンは絶対に何かを知っている。それを何故黙っているのか。

過去に何があったのか・・・そして今、旧時代のPCが存在する理由。

謎が謎だらけだ。

「まるで、ルーン自体が“Key of The Twilight”みたいですね」

私は自分で言っておきながら、思わず笑ってしまった。

「・・・確かに。言いえて妙、って感じだね」

「まあ流石に、伝説のアイテムがPCって事は無いでしょうけど」  
そう言ってから・・・何かにひっかかって私の頭は考えを一度スト

ツプさせた。

え・・・？

脳内に急に広がる思考の海。

突如広がる仮定の波紋。

波紋は一滴の雫から大きなうねりへと変化し、私を簡単に引きずり込む。

ルーンのPCが“Key of The Twilight”、それはありえないかもしれない。

でももしルーンが、“Key of The Twilight”やそれにつながる何かを、“持っている”としたら？

PCは削除される事無く、R2という新世界に振り返いた。

装備しているアイテムは、R1はおろかR2にもここにしかない一点もの。

ありえない出来事も全て、ありえる出来事になるのではないか？

“Key of The Twilight”はそういう名目の伝説のアイテムだ。

でも、疑問も残る。

どうして“Key of The Twilight”を持っているのか。

そして“Key of The Twilight”を所持しているとしたら――

――何故“Key of The Twilight”の危険性に怯えているのか。

そうだ。ルーンは“Key of The Twilight”に

恐れに近い感情も抱いている。

それくらい感情を持っていなければ、あのルーンが、お姉ちゃん  
が本気で激昂したりするものか。

隣でずっと続いていた、さくさくと草を踏む音が止まる。

私はハッとして顔を上げた。突然襲われた仮定の波紋が静まってい  
く。

「・・・志乃さん？」

「・・・ほら、敵が居るから」

志乃さんは進行方向の先を指差した。モンスターが三匹ほど宝箱を  
囲い、平原に視線を飛ばしている。

私はさっきまで何を考えていたのだったか。

深々とした混沌カオスのような、追いかけても追いかけても答えの見つか  
らない・・・何か複雑な謎について考えていたはずだ。

額に手を当てて記憶を探るが、しかし一度すり抜けてしまったそれ  
は、どんなにさっきまでの自分を思い起こしてもめぐり合う事は無  
かった。

「それじゃ、話はここまでにしよっか」

またも考えに没頭してしまった自分の視界に、志乃さんの優しい微  
笑が見える。

「あ、・・・はい。じゃあ・・・やりましょっか！」

気分を切り替える。戦いに集中。私は大剣を構える。志乃さんも自  
らの呪杖を取り出した。

敵はこちらに気づいていない。特に警戒する様子も見せず、こちら  
に背中を向けた。

チャンス！

「ていやあああああつつつ！！！」

私は大剣を振りかざし、志乃さんは呪杖を構え、不意打ちをかけて  
一気に敵に突っ込んだ。

結局、戦いの中で私は忘れた事も忘れ、何処か真意に迫っていた気

もする混沌は忘却の彼方と追いやられていった。

\*\*\*

同時刻、“マク・アヌ”に五つのPCが降り立った。

「ログイン完了つと・・・うわぁ・・・」

「すげーなあ。R1の時より全然グラフィック進化してるじゃねえか」

「・・・だが、俺のPCもお前らのPCも・・・」

「・・・元のまま、よね」

「まったく・・・全員、キャラ残ってたか」

その内の一人は、長く紅い髪を蝶を模した金色の髪飾りで一つに束ねた女である。

「私の仮説は話したな」

「“女神が、世界を守る為にこのPCを護ったのでは”ってやつだね」

「そうだ。確認する方法は思いつかないがな」

女は頷いて、それから言葉を続ける。

「・・・とりあえず、全員で仕様外エリアを回ってみようと思ってる」

「メールにあった、“ロストグラウンド”の事？」

一人の少年型のPCの言葉に、女は頷いた。

「そうだ。色々思うところのあるエリアが残っていたよ」

一応見つかっているところは全部見て回った、と女は言う。

「見つかっているところ・・・というと？」

羽を持った銀髪の剣士が腕を組む。

「お前なら知ってるんじゃないのか？CC社勤めのGMやってたんだろう？」

大柄の、体中をペイントで覆った男が聞き返す。

「・・・いや、俺はあまりロストグラウンドには関わらなかったか

らな」

剣士は首を振る。

「R1は消えたから・・・そういう事実があるから、あまり興味が  
わかなかつたんでしょ」

日に焼けた肢体を軽鎧に包む女戦士が言った。

「実際、私達はR2が始まってログインしなかったじゃない？ま  
あ、GMは別として」

「俺にしても、このPCが残っているのは知らなかったしな・・・」

「私がR2を始めなければ、誰も気づかなかつたかもしれないな」  
女が笑った。

「でも、“hackers”のほかのメンバーは何で呼ばなかつ  
たの？」

少年が言う。女は首を振った。

「呼ばなかつたんじゃない、連絡先が分からないんだ。リヨースや  
ワイズマン・・・あ、ヘルバは知ってる方がおかしいんだろうが」  
脳裏に蘇る、飄々としたスーパースターハッカーの笑顔。

「・・・それは全面的に同意」

四人が同時に頷いた。全員で顔を見合わせ、思わず噴き出してしま  
う。

「・・・それじゃ、そろそろ行くか」

ひとしきり笑った後、女はカオスゲートを指した。

「ロストグラウンドをとりあえず見つかつて分全部周ろう。周り  
ながら今の世界情勢を説明する」

「そこは俺も手伝おう。管理者用に作った別PCで最近までログイ  
ンしてたからな」

「そうだな。CC社側の説明は私も聞きたい」

女は頷くと、カオスゲートに向かう。

「それじゃ、行動開始だな！」

大柄の男が楽しそうに言った。

「手始めにどこに行くの？」

「そうだな・・・△隠されし 禁断の 飛瀑”。私が初めて行ったロストグラウンドだ」

そういうと女——ルーンは、仲間達を振り返った。

「——カイト、オルカ、バルムンク、ブラックローズ」

久しぶりにルーンは仲間の名前を口にした。

それは深く馴染んでいて・・・R1消滅の時から、殆ど呼べなかった名前。

「・・・行こうっ！」

それを今、私は呼んでいる。思い出の中ではない。今、呼んでいる。それがたまらなく——ルーンは嬉しかった。

## FILE 12：思考・邂逅・英雄達（後書き）

総読者数がもうすぐ1700人になります。応援、ありがとうございます。  
います・・・！！感涙です。

更新スピードをもっと上げられればいいのですが・・・申し訳ない  
です。

これからも頑張りますので、応援・感想、是非お願いします！！

FILE 13: Secret quest (前書き)

黄昏を知る者よ 叫ぶが良い

全ての仮定は覆され 全ての仮定は肯定される

## FILE 13 : Secret quest

暗い闇の中に、光の線が走る。

石畳の床に真つ直ぐに絨毯が敷かれ、その最奥の壁には永遠の象徴ともいえるウロボロスのレリーフが時を刻む。

光は交差し、幾つもの画面を生み出している。映るのはこの場とは縁遠い風景。黄昏時の街並や暗い洞窟、夕日に照らされた草原などだった——“The world”の景色だ。

そこは、“The world”の中にありながら、一般の仕様にならない区画。仕様にならない世界観を持つ、異色の場所。

一人の獣の姿の男が、画面を見入っている。

「・・・何故・・・？」

漏れる言葉。

男は幾つもの画像の内、たった一つのみを凝視していた。

カオスゲートの前に立つ数人のPC達。

懐かしすぎる顔が並ぶ。懐かしすぎる声がする。

あるはずのない光景がある。

それはこの男の立つ異色の場所よりもなお異色——いや、異常だ。

「・・・八咫様」

後ろに、女性の声が聞こえた。男は画面を凝視し振り返ることなく言った。

「このPCの時は——」

「申し訳ありません、直毘」

女性の声はすぐさま名を訂正すると、本題を切り出した。

「先日、“彼”が新たに声をかけた二人の初心者PCのプレイヤーの詳細をお持ちしました」

女性の声と同時に、男の目の前、画面の横にもう一つスクリーンが表示された。

細かく書かれたリアル。それは名前、住所、写真はては通う学校に

至るまで精密に書かれた、法律に抵触しかねない程の詳しい個人情報報だった。

表示させつつ、画面を見る男のために女性はその個人情報をかいつまんで説明する。

「PCルーン、及びPCリリナのプレイヤーは東京都在住の姉妹です。ルーンが姉、“榎本 響”。リリナは妹の“榎本 鈴菜”」

「妹・・・？」

男の声は興味深げだった。

「そういえば・・・ずっと、妹とプレイするのを楽しみにしていたな・・・」

懐かしい。それは、彼女が戦い続ける理由の一つでもあったはずだ。

「・・・？」

「・・・なんでもない」

訝しがる女性にそれだけ告げ、男は画面を見続ける。

ちょうど数人のPC達は、カオスゲートからエリア転送したところだった。

すぐさまデータを確認する。飛んだ場所は“△隠されし 禁断の飛瀑”。

男はPC達の様子を追いながら、女性に向かって言った。

「エンダー、黄昏の旅団の方だが——」

「はい」

「目を離すな。念には念をだ。些細な情報も見逃すな」

女性は頷いた。上司の命令は絶対だ。

「了解しました」

「それと——」

「？」

「・・・いや、いい。こちらでやる。君は、調査を続けてくれたまえ」

「はい。・・・失礼しました」

女は異色の場所から去っていく。

その気配を背中に感じながら、男は黙って画面を見ていた。

映像はすでに滝の流れ落ちるエリアへと切り替わっていた。プラットフォームの周りにPC達が転送されてきた。驚いたようなざわめきを発するPC達に、一人が何事かを説明する。

それを見ながら、男は顎に手を当てた。この獣の姿ではあまり似合うものではないが、既に癖となっている動作だ。

（彼らは・・・今回の件に何か関係しているのか・・・？）

彼らがこの世界に居る事はおかしい・・・いや、彼らがあのPCでこの世界に居る事はおかしい。R1のPCデータのR2への引継ぎは行われなかったのだから。

CC社以外でこんな事ができるのは、一部を除けば“彼女”だけだ。消失して眠りについたはずの“彼女”――。

（“彼女”の力が――彼らの消失を防いでR2に移行させた？ならばそれは、何故）

男は首を振った。

（今はまだ仮説しか立たない。情報が少なすぎる）

自分がここに携わる理由である事件は、これからどんどん酷くなっていく筈だ。

（彼らがまだ“黄昏の力”を持っているならば・・・）

それは魅力的なまでに強い戦力となる筈。

男は自らの前に浮かぶ球体に手をかざした。それはこの場を操る操作端末。彼らのPCを追いかけて観察し、映像をくまなく記録するように設定する。

彼らは既に動いている。何故PCが残されているのかすら分からないまま、それでも真実を知ろうと動き始めている。

動き続けた延長線上には、彼らは必ず我々と出会っだろう。

“The world”を愛する彼らは、絶対を守ろうとするのだから――

ならば今は、観察するのみ。

男は静かに、画面を見つめるのだった。

\*\*\*

草原エリアのミッションをクリアした私と志乃さんは、マク・アヌに戻ってきていた。

「大分強くなったね、リリナ」

カオスゲートの転送モーションが消えた直後、そう言って志乃さんは優しく微笑んだ。

「いえ、志乃さんやルーンのお陰です」

私はそう答える。謙遜でもなんでもなく、本当に真実だ。

中級者とは言えなくても、初心者とも言わせない程度のレベル。

二人とは比べるべくもなく低いレベルではあるが、それでも短期間でここまでレベルを上げる事ができたのはひとえに二人のお陰なのである。

「そんな事ないよ。私達は少し支えただけ。リリナが頑張ったからだよ？」

志乃さんは、優しくそう言った。

本当にいい人だ。優しくて聡明でレベルも高くて。

The worldで初めて仲良くなった人が志乃さんで良かったと、私は深く深く思う。

私と志乃さんはドームの外、街中へと続く扉に向かって歩き出した。

「そうだ。そろそろ、クエスト受けてみようか？」

「クエスト・・・ですか？」

私は説明書に載っていたクエストの事を思い出す。クエストとはNPCからの依頼を受けるといって一種のイベントで、期間限定でさまざまなものが公開されるのだ。

クエストをクリアすれば賞品としてアイテムを受け取る事ができたり、連動した別のイベントを発生させる事が出来るようになったりする。

「まだ一度も受けてなかったでしょ？この機会にどうかな、って」

志乃さんは駄目？と首をかしげた。

私に特に断る理由もない。それにクエストに参加してみたい気持ちは大きかった。

「行きます！」

「そうこなくちゃ。じゃあ、まずはクエスト屋だね」

志乃さんが微笑む。私も微笑み返した。

私達は扉を大きく開いた。

黄昏時の光が、視界を染め上げる。

何処か切なげな雰囲気も併せ持つ街を、行き交うプレイヤー達の笑い声が活気付けている。

街の中心ともいえるドーム前の中央広場。

中心にすえられた噴水を囲むように露店が広がっている。

「癒しの水、一個オマケするよー！」「武器ならウチが一番！！攻撃力は保障するぜ！！」

そんな売り子の威勢のいい声を背に聞きながら、私と志乃さんは広場を横切った。

広場を横切ればすぐそこに、ヴァイタルビスタが居る小さな受付がある。

ヴァイタルビスタとはマク・アヌに居るNPCの事だ。

志乃さんがヴァイタルビスタに話しかける。すると、今受けられるクエストのリストが私の画面にも表示された。

「うわぁ・・・いっぱいあるんですね」

モンスター討伐、アイテム収集、NPCの護衛、アイテム争奪戦にPK討伐まで・・・

全てのクエストには参加人数の規定や適正レベルがあるようだ。私はそれを見ながら、リストを眺める。

「志乃さん、どれにします？・・・って言っても、二人で参加できるクエスト少ないですけど」

大体のクエストは、一人だけで挑戦する上級者向けのものもあるが、

パーティ最大人数の三人組限定のものが多い。制限が無いものは一握りだった。

志乃さんはリストを眺めながら、何かを考えている。暫しの沈黙。しばらくリストとのにらめっこを続けていた志乃さんが、軽く頷いた。

「ねえリリナ、私、受けたいクエストがあるんだ」

「え、どれですか？」

「これ」

志乃さんはリストの一つを指差した。

“月明かりの黒き英知”という名がつけられたクエストだった。パーティ制限人数は二人と、かなり珍しい。

「・・・？」

私は首をかしげる。他のクエストは名前をターゲットすると詳細情報が現れるのに、これはタイトルしか出ていないのだ。詳細情報には????の文字が並ぶのみ。

「これ、最近始まったシークレットクエストなんだって。期間限定で開かれてる、内容も賞品も適正レベルも全く不明のクエストなんだよ」

志乃さんが簡単に説明してくれた。

「そんなのがあるんですか・・・」

月明かりの黒き英知、と私は名前を反芻した。  
なにやら謎めいたタイトルだ。一体どんなクエストなのだろう？

「どうする？リリナ。これ、受ける？」

志乃さんに私は強く頷いた。

志乃さんは微笑んで、受付のリストを選択する。

「このパーティで参加しますか？」のテロップに「はい」を選択。

「分かりました、それではしばらくお待ちください」

受付のヴァイタルビスタは、プログラムされているゆっくりとした動作で電話機を手に取った。

「あー、もしもし。どうも、マク・アヌのクエスト屋です。ソース

ラーさんの依頼を受けてくれる冒険者さんが現れました・・・」  
のんびりとしたヴァイタルビスタの言葉を聞きながら、私はドキドキする気持ちを抑えきれずに居た。

## FILE 13: Secret quest (後書き)

読者数2000人突破しました!!

応援してくださる方、読んでくださる皆様、感想をくれる方々、皆様に感謝の気持ちでいっぱいです・・・!!

これからも日々精進していきますので、応援・感想・誤字指摘など、よろしくお願いいたします。

FILE 14：英雄達、古き地にて（前書き）

知らない事が多すぎて

知ってる事が多すぎて

どれが真実 どれが嘘？

教えてください女神様

## FILE 14：英雄達、古き地にて

「貴方達が依頼を受けてくださった冒険者様ですか？」

クエスト屋の電話で呼び出されたのは、ヴァイタルビスタの男性だった。

「私は依頼者のソースラーです。この依頼を引き受けてくださり、感謝します」

型にはまった挨拶。言葉には音声すら用意されておらず、テロップのみが淡々と流れていく。

いかにもNPCといった感じが逆にどこか怪しさを感じさせるのは、私の気のせいだろうか。

「実は私、古文書などに書かれた古代の呪紋の研究をしているので」

その違和感は、やっぱり謎めいたクエストの雰囲気の原因なのだろうか。

そんな私の考えなどNPCに伝わるわけもなく、ソースラーはただ文字通り淡々と言葉を並べていく。

要約すると、古文書に書かれていた魔術を試して失敗し、その場所からはじき出されてしまったらしい。そのため、魔術の為に用意した貴重な呪具や歴史ある法具をその場に置き去りにしてしまい、これ以上の研究が出来なくなっているそうだ。

自分で取りに行けばいいのにと正直思うが、どういうわけか失敗した魔術の力の影響で自分はどうしてもその場所に踏み込めないらしい。

報酬にそのアイテムの中から好きなものを二つをプレゼントするので、どうか道具を回収してきて欲しい、とまあ設定は色々細かいところがあるが、アイテム収集というありきたりな部類に入るクエストのようである。

「二つつていうからには、一人一つずつアイテムが手に入るってことだね」

「でも何だかんだ言って、結局どういうアイテムが手に入るかは秘密なんですね」

相変わらず不可思議な謎が残るクエストだ。

ソースラーは「それでは、どうかよろしくお願いします。どうか、ご無事で・・・」と最後になんか不安になる溜めを作った台詞を流して去って言った。

「エリアワード入手：△かりぬいの 月光差す 闇黒」！  
流れるテロップを目で追いながら、私は呟く。

「ソースラーって、sorcerer・・・妖術使いの事ですかね？」

実際どうでもいいようなことなのだが、何となく思いついたことだった。

「かもね。呪紋研究をしてるって言ってたし、それからとってつけた名前かも」

志乃さんが笑顔で答える。

だが、私が気になるのは・・・

「でも、妖術使っていえば・・・超自然的な力を使って悪事を働くものをさすんですけど」

「そうなの？」

志乃さんは驚いたようだった。「博識なんだね」

「いや、そんな大層なものじゃないです」

趣味が読書なのでそれなりに色々知ってるだけだ。殆どが一般的には役に立たない豆知識だが。

「それより、何か気になりませんか？」

「うーん・・・私も、このクエストを受けるのは初めてだからなあ・・・」

志乃さんはそういうと、笑って言った。

「この場合は悩むより行動、かな。シークレットクエストってくら

いだもの、何があってもおかしくないよ」

志乃さんのその言葉に、確かにと私は納得する。

「・・・じゃあ、行動あるのみ、ですねっ！行きましようか！！」  
私達はカオスゲートのあるドームへと向かった。

\*\*\*

「そういえばルーンの妹、始めたんでしょ？ゲーム」  
カイトがふとルーンを振り返った。

“△隠されし 禁断の 絶対城壁”、モーリー・バロウ城砦。

巨大な崖の中、一枚岩がまるで巨大な壁のように天に向かい真っ直ぐに伸びている。その壁に密着するように出来た半円状の小さな場所が、モーリー・バロウ城砦のエリア区間だ。

巨大な壁と、崖しかない。本当に何故存在するのか不可解な場所。

ルーンは壁を見上げていた視線をカイトに戻した。

「ああ。R：2は一緒に始めたからな」

「へえ、やっと長年の夢が叶ったのか」

オルカが話に乗り込んでくる。ブラッククローズとバルムンクも、こちらを見ていた。

ルーンは思わず苦笑した。

「・・・そんなに気になるか？私の妹」

「まあ・・・そりゃ、多少ね」

ブラッククローズが頭をかく。

「七年前からずっと言っていただろう？“妹とゲームがしたい”ってな」

気になるに決まっているとバルムンクが頷いた。

「あー、そうだったな・・・」

思い起こせばそうだった。平和なThe worldに鈴菜を連れて行きたいと願っていた。

時は流れ、世界は旧世界となり、世界は新世界となった。ルーンは

一新してしまった始まりの場所で、やっと願いをかなえたのだ。

「一体どんなキャラエディットにしたの、ルーンの妹」

「人族だよ、リアルに似せてみたいだな。髪の毛や瞳は蒼だ」  
それから少し言葉を切る。

「・・・私が言うのもなんだが、びっくりするような美人だぞ？」

「・・・お前、シスコンっぷり上がってないか——いて」

ガスツという気前いい音を立て、ルーンの手刀がオルカの頭にヒツトした。

「黙れ。シスコンとか言うな、断じて違うから」

そんな後ろ指さされるような感情じゃない。

「どうせなら親馬鹿とか言え、それなら否定できないから」

「・・・ねえルーン、親馬鹿も褒められたもんじゃないと思うわよ？」

ブラックローズが思いつきり噴き出した。

それをきっかけに、皆が爆笑してしまう。

「・・・なんていうか、変わってないな、俺達は」

笑いが収まると、バルムンクが感慨深げに言った。

最後に会ったのは三年前だ。カイト達は進路設定や受験で忙しく、ブラックローズは既に大学生で、バルムンクはGMとして、部下のレキというPCと“The world”の中を駆け巡っていた。アウラが娘とするAI“ゼフィ”を作って、カイトとブラックローズの同タイプPCをある双子の兄妹に与えていた年だったか。びっくりするほど世界が平和だったあの頃。

まさか突然世界が消えるなどと、誰も思わなかったあの頃。

「いまやPKが平然と横行する世界、ね・・・」

ルーンはボソリと呟いた。見上げた空は青い。

あの時と同じように、こんなにも綺麗なのに。

「それでも、良心はある」

カイトは空に手を伸ばした。

「この世界はまだまだ捨てたものじゃない、でしょ？」

グツと、手を握る。

ルーンは笑った。

「今の世界を作っているのは他でもない、“人の想い”なのかもしれない、な」

だから汚いものも辛いものも、綺麗なものも嬉しいものもある。

人の心の数、違ったものが見える。

今はPKが多く目立つだけで、ちゃんとその裏には善意を持つ人々が居るのだ。

「・・・今の世界は平和ではない。だけど、意識不明者が出るような不幸はない」

バルムンクが言った。

「・・・今のところは、な」

「な〜んか、引つかかる言い方よね」

ブラックローズの言葉に、オルカは両手を広げて言った。

「仕方ないだろ、どー考えてもおかしい事起きてるしな」

ロストグラウンド、ロストパーソンとして残された自分達、消失した女神、そして、

「・・・“Key of The Twilight”を求める者」

「黄昏の旅団・・・オーヴァン、か」

チートでもしなければありえないような巨大な拘束具に左腕を包む男。

都市伝説のような存在の“Key of The Twilight”の存在を認め、追い求める者。

謎が多すぎる。どの謎も、新世界に降り立ったばかりの自分達には分からないものばかりだった。

「結局さあ、何がどうなってるやら、私達だ〜れも知らないのよね」

ブラックローズの言葉はもっともだった。

「それを知る為に、ここに居るんだらう?」

ルーンはプラットホームに向かって歩き出す。

「でも、会えるかどうかさえ謎なのよ?」

「会えるさ」

それを言ったのはカイトだった。

「信じる力が大切なんだって、きつと——”ならそう言っよ」

「——、それは、確かに」

ブラックローズは深く頷いた。

「さ、もうそろそろ次に行こうか」

ルーンはプラットホームに手をかざした。

「次の場所は——」

光に包まれ、五人の姿が消える。

風が吹いて、小さな場所に懸命に伸びる草が揺れた。

#### FILE 14：英雄達、古き地にて（後書き）

連休が予想以上に忙しくなり、お待たせする事になってしまいました。ごめんなさい。

そしてスランプ突入です（汗

話も大きな波に突入していかなければならない部分ですが、そこにたどり着くまでに越えなければならぬ小波が何故かだんだんと増えていく・・・（汗

応援と感想、それから叱咤激励が励みになります。

どうかよろしくお願いします！

FILE 15：怖がりのラプソディー（前書き）

さあ走れと闇が言う

言われなくても走ろうぞ

誓いと決意が背を押した

怖がり娘の狂詩曲

## FILE 15：怖がりのラプソディー

△かりぬいの 月光差す 闇黒△

カオスゲートから私達が転送されたその場所は、薄暗い洞窟<sup>エリア</sup>だった。そこは灰色の岩石に覆われた閉鎖空間。ただ真っ直ぐに延びる一本道。奥は暗く、この先に何があるか視界に認識することは出来なかった。天井高く岩々には所々亀裂や穴があるようだが、日光が注ぐことは殆ど無い所を見るに、多分外は夜という設定なのだろう。暗い中、足元の所々をぼんやりと発光する植物が繁殖して道を照らしている。

「うわ。何て言うか・・・雰囲気ありますね」

私は思わず後ずさりそうになった。

洞窟タイプのダンジョンに入ったのは決して初めてではない。だが、何と言うか・・・前に入ったダンジョンはもっと明かりもあったし、見通しもよかった筈だ。

それにグラフィックが売りの一つでもある“The world”に具現したこの場所は、現実にも迫るようなリアリティがあった。BGMは無い、だか無音でもない。ただただ、ヒュオオオと恐ろしげな音をたてて風が吹き抜けるのがM2Dを介して耳に届く。

正直に言う。・・・かなり、怖い。

「クエストの専用エリアみたいだね。暗いから、気をつけないとモンスターに不意打ちされちゃうかも」

志乃さんはまったく動揺も怖じけづく様子も無いようだった。

「さ、行こうか」

「は、はひいっ！」

私は慌てて返事をした。少し声が裏返った。・・・少しだと信じた

い。  
一瞬驚いたような顔を志乃さんがする。

「・・・どうしたの？」

「あ、いや、何でもありません」

「・・・そう？」

「はいっ！何でもありませんっ！さ、は、早く行きましょ——」

私はごまかすように暗い道に一步踏み出した。瞬間——

バサバサバサッ！！

「ひいああああっ！？」

叫んだ。あられもなく大声でなりふり構わず叫んだ。

振り仰ぐと、蝙蝠<sup>こうもり</sup>らしき影がうごめいている様子が確認出来る。ターゲット出来ないようなので、モンスターではなく雰囲気に合わせて作られたダンジョンのオプションなのだろう。分類で言えば「背景」にあたるもの。でも、それにしたって精巧すぎる。怖い。不意打ちは卑怯だ。

「は、はああ・・・びっくりした・・・」

私の心臓は早鐘のように鳴り続ける。

「ちよつとりリナ、大丈夫？」

流石に何事かと、志乃さんが顔を覗き込んできた。

「ただ大丈夫ですっ！何でもにやいですっ！」

慌てすぎて激しく嚙んだ気がする。・・・気のせいだと信じよう。痛む舌も気のせいだ。

私の顔を覗き込む志乃さんの表情には、呆れより心配の情の方が大きく現れている。人間、こういう所に自分の本性が現れるものだと何かの本に書いてあった気がする。だとすれば志乃さんは人間的に最上級の人なのだろう。やっぱり素晴らしい人なのだ流石志乃さん。

「リリナ、もしかしてこういう所は苦手だった？」

私の稚拙な現実逃避は、当然あっさりと叩き壊された。

\*\*\*

昔から、こういうのは苦手だった。小学校での肝試しで気絶したことは、私が卒業した今でも伝説に残っていると聞く。

幽霊話は苦手、肝試しをやると言われれば迷わずその場を回れ右した。

遊園地にあるお化け屋敷ですら悲鳴を上げて逃げ出した事もある。

「そっか・・・じゃあ、悪い事しちゃったかな」

その辺の話をかいつまんで説明すると、志乃さんは少ししよげた様に謝ってきた。

「こんなクエストに誘っちゃって、ごめんね」

「なっ・・・謝らないくださいよ！志乃さんは悪くありませんっ！」

私は慌てて、手をぶんぶん振った。

志乃さんは好意でクエストに誘ってくれたのだ。

「志乃さんがクエストに誘ってくれて、本当に嬉しかったんですから」

そうして暗闇の奥に足を踏み込む。

もう既に蝙蝠は全て飛び去った後で、不意打ち気味の羽音は聞こえない。

「でも・・・大丈夫？」

志乃さんは心配そうにおずおずと尋ねてきた。

「そりゃ、このエリアは怖いですけど・・・」

私は笑顔で言った。

「でも大丈夫ですよ。志乃さんが居るじゃないですか」

ルーンと同じくらい、この世界で信頼を寄せる人が居るのだ。多少怖くても何とかなる。

「ほら、それにもしかしたらこれがきつかけで怖がりも治るかもしれないませんし」  
驚いたような顔をしていた志乃さんは、やがていつもの笑みを浮かべた。

「・・・そつか。じゃあ、どんどん奥に行こう」

\*\*\*

実際、このエリアは私の苦手なものを全部つぎ込んで作られたかのような雰囲気を持っていた。

例えば終わりの見えないこの一本道。歩けど歩けど、その奥先は見えることが無い。そして道も終わらない。階段も宝箱も無い単調な道。それが逆に、不安と恐怖を生み出すのだ。

そしてオブションもそう。

あの羽音のギミックは一つではなく、それ以外にもいくつもの雰囲気作りのための「背景」が用意されている。

突然蜘蛛のような虫が降りてくる。いきなり真後ろでガタンと大きな音がする。見えないダンジョンの奥のほうから獣の遠吠えが聞こえる・・・などなど。数えればきりが無い。

一人で来ていたら間違はなく失神していた事だろう。そう思えるほどここはリアルで精巧な恐怖の空間だった。

当然、ギミックだけではなくモンスターも居る。

私でもあまり苦勞せず倒せるレベルのモンスターではあるが、この暗闇の明かりの乏しい中だと不意打ち気味に襲ってくるので気が抜けない。

「さすが、シークレットつてだけの事はあるね」

急に後ろから襲ってきた狼型のモンスターを呪杖で打ち据え、志乃さんは呟く。

不幸中の幸いなのは、モンスターのビジュアルは普通であつた点だ

ろうか。

化け物デザインのモンスターだったら・・・情けないが、自分は叫ぶか怯えるか何も考えずがむしゃらに剣を振り回すかのどれかだっただろう。

そんな状態だったら志乃さんのバトルには邪魔になるし、むしろ普通に足手まといになってたはずだ。レベルが高いとはいえ、呪癒士という戦いに不向きなジョブの志乃さんに余計な手を煩わせたくはなかった。ただでさえ私は物音一つでビクビクしている小心者なのだし。

また目の前を、蝙蝠がいきなり飛び去った。

「ひゃっ——」

めちゃくちゃな悲鳴を上げることは抑えられるが、パニックになってしまふところはどうしても変えられない。昔から苦手なものだから、一朝一夕には変えられないのが普通ではあるうが。

でも、私は大丈夫だった。

「大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

支えてくれる志乃さんがいるからだ。

志乃さんがいるから、私はここでも平気なのに・・・

\*\*\*

「どうして、どうして一人になるの——!？」

ポツンと、長い道の真ん中に私一人。

涙交じりの私の叫びは、ただむなしく暗い洞窟に響いただけだった。

それは、少し前に遡る。

志乃さんと私はあれから10分程で、通路の最奥にたどり着いた。

奥にあったのは、二つのワープポイントである。

それ以外には、何も無い。道は行き止まりで、灰色の岩壁が目の前を塞いでいる。

「・・・これを使えって事みたいだね」

志乃さんが一方のワープポイントに手をかざした。・・・起動しない。

何かテキストでも表示されたいらしい。空中を目で追っていた志乃さんは・・・そして、無言になる。

「・・・どうしたんです、か？」

私が訪ねると、志乃さんは凄く、それはもう物凄く複雑な顔をして言った。

「・・・これね、二つ同時じゃないと起動しないみたいなの」

そういうわけで――私は今に至る。

二つ同時に起動するということは、イコール別行動になる、というわけで。

私はようやくこのクエストが二人パーティ限定である理由を思い知ったわけである。

「ううう・・・」

さっきまで志乃さんと歩いていた場所とあまり変わらぬ洞窟が、視界に広がっている。さっきより少し手狭で、道もあまり長くなさそうなだけだった。

ついさつき、「一人で来ていたら間違ひなく失神していただろう」と言っただが、まさか地でそんなことが起こるとは。

「行く・・・しかないのかなあ・・・」

恐る恐る上を見上げるが、蝙蝠のギミックは無い様子だった。

「・・・」

安堵する。

「志乃さんも、こんなトコに飛ばされてるのかなぁ・・・」

大丈夫かとワイプを起動する前に何度も何度も声を掛けてくれた志乃さんを思い起こす。

その度に、固まる思いは一つだった。

誘ってくれた志乃さんのためにも、自分のためにも、

このクエストを、クリアしなくてはと。

私は無言で、強く剣を握り締める。

「負けてたまるか・・・」

巨大な重剣が植物の光に照らされ鈍く輝いた。

「負けてたまるかぁー！！！」

私は叫びながら、目の前の道を全速力で駆け出した。

## FILE 15：怖がりのラプソディー（後書き）

毎回ながら、更新が遅れて申し訳ありません！！

次回、クエスト編最終話に・・・できたらいいなと思っております。  
感想・激励・アドバイス等ございましたらよろしく願いします！

FILE 16：月影に宿る者（前書き）

逃げても逃げても逃げ切れぬ

光と影はウラオモテ

## FILE 16：月影に宿る者

「リリナ、大丈夫かな・・・」

志乃は後ろを振り返った。

暗くてよく見えない、灰色の洞窟がただ続いている。

（まさか、個人行動をとらなきゃいけないクエストだったなんて・・・）

レベル差があるので何とか呪癒士ハーヴェストの自分だけでもやっていけるが、向こう側はどうなのだろうか。リリナのレベルは確か適正より高かったと思うが、この暗闇で無事だろうかと心配になる。

「・・・悩んでる場合じゃ、ないか」

信じることも大切だと志乃は思い直した。リリナは頑張れる子だ、きつと最深部を目指して突き進んでいるに違いない。ならば自分に来ることはただ一つ。合流できる地点を探して、リリナを待とう。志乃は前を向きなおし、暗闇の奥地に進んでいった。

\*\*\*

「たあああッッ！」

襲い来るモンスターに、剣戟を叩き込む。

すぐに真後ろから襲い掛かる三匹の影。大きく後ろに跳び、彼奴らの刃を避ける。

視覚に敵を確認、ゴブリン系の魔物だ。これならいけるとすぐに読む。

私は一気に跳躍し、ゴブリン共に突っ込んだ。

風車の如く、大きく剣を振る。

「骨破碎ッッ！！」

硬殻特攻のスキルは、普通モンスターに使ってもかなりの大打撃となる。

三匹のゴブリンは面白いように吹き飛び、灰色の死亡表示になり闇に消える。

「・・・ふう・・・」

息をついて探るが、周りの気配はもう消えていた。あのゴブリンで最後だったのだろう。

「やっぱり暗いのは危険だよ・・・」

一人で食らう不意打ちはこれで三度目だ。どんなに周りに気を配っても、視界に映らないモンスターへの警戒は難しい。

第一、怖いし。

「早く、志乃さんと合流したい・・・」

こんな所に一人はもう懲り懲りだ。怖いので。

私は剣を構えなおし、気配を探りながら道を進む。

最初のように叫びながら駆け抜けたりはしない。正直モンスターに気づかれまくり襲われまくりで大変だったので、二度とやらないと決めた。ちゃんと教訓を生かせる、うん。

「それにしても・・・」

長い道のりだなあ、と息をついた。

「志乃さんは、きつともう先に行ってるんだろうな」

脳裏に、呪杖を構え敵と対峙する志乃さんの姿が浮かぶ。呪癒士といえど、このエリアレベルなら普通のバトルもこなすことの出来る、高レベルプレイヤーの志乃さん。心配はまったくいらないう。

志乃さんは、強くて美人で優しい。もちろん私はPCを通しての志乃さんしか知らないが、PCの向こう側・・・現実リアルの志乃さんもきつとPCそのままの人ではないかと思う。少なくとも演技には見えないし、どっちにしろ優しさは本物だ。

「私も、あんな風になれたらなあ・・・」

人間性の方とはかく、レベルに関してはとにかく修行あるのみだとは分かっているが。

「・・・つとと、いけないいけない。早く進まなきゃ・・・」  
考え込んでいるうちに足が止まってしまっていた。こんな風にぼんやりと突っ立ってはいっていつ不意打ちされるかも分からない。私は意識を戻し、また歩を進め始めた。

\*\*\*

「ここは・・・扉？」

通路の最奥に辿り着いた志乃が見たのは、大きな扉だった。最初に辿り着いた通路の行き止まりに良く似たそこは、あの時とは違って扉がある。

「この向こうで、合流できるのかな」

そこまで呟いて、そんなはずは無いと首を振った。

それだけならわざわざ、PTを別行動させる必要など無いのだ。今まで歩いてきた通路はただモンスターが出るだけで、特殊な事は何も起きなかったのだから。

となれば、何かがあるなら・・・それはこの扉の向こうだ。

志乃は迷い無く扉を開いた。

瞬間、視界が黒から白へと変わり――

そして、そこで、

「・・・！！」

開いたその先の光景とそれを見た。

「これが・・・PTを分けた理由・・・」

志乃は手を背中に回す。はじける光。自らの獲物を引き出す。

「ちよつと・・・大変、かな」

呪杖を握り締め、それを見定めるその顔は、いつもより少し強張っ

ていた。

\*\*\*

「・・・あれ、ここが一番奥かな」

私は足を止めた。長い通路の突き当たりに、大きな扉がそびえている。

他には何も無く、モンスターも自分がさっき倒したので気配も無い。

「この扉の向こう、何があるんだろ・・・」

普通に考えれば、大体こういう奥地にはボスが付き物というところだ。

「うう・・・化け物デザインだったらどうしょ・・・」

・・・どうしようもない。多分、泣く。

でも、ここでいつまでも立ち止まってるわけにはいかない。

このクエストをクリアすると決めたのだ。その気持ちに嘘偽りなど無い。負けられない。

「・・・よし・・・」

私はゆつくりと、扉を押した。

\*\*\*

——黒と白が入れ替わった。

「えっ・・・？」

視界に入る光景に、瞬間にそう思った。

「まぶしっ・・・」

開いた扉の先は、ただ広いだけでさつきと同じ洞窟内の空間だ。しかし今までとははつきりと違う部分があった。

とてつもなく、明るい。

今までの暗闇とはまったく違う、光の広場。

想像していた、暗黒の魔国のような図とはかけ離れたその場所に、少し拍子抜けした。

「あー・・・天井が、無いんだ」

上を見上げて納得する。天井は吹き抜けとなり、そこから大きな白銀の満月が覗く。

この広場を照らす月明かりは、湿り気を帯びた洞窟内の岩々に反射してさらに強くなる。

そこはさながら、冷たい月に支配された広場だった。

「凄い・・・目、チ力チ力する」

視力が落ちそうだ。公式BBSで後で文句でも言ってみようか。

暗闇からいきなり光の真下に放り出されたら、そりや当然目には良くない。

明日からブルーベリーでも食べてみようかと、私はまったく関係ない事を考えながら広場に足を踏み込んだ。

「・・・あれ？」

エリアのMAPを見て、私はふと気づく。

「・・・出口が無い・・・」

表示されたMAPには、私が今入ってきた入り口しか表示されていなかった。

（・・・ここ、本当に行き止まり？）

とりあえず、調べてみなければ何も始まらない。

私は広場の中心、月の光が一番当たるその場所に踏み出した。

その時だった。

「——ッッ!？」

何かが——揺らめいた。

思わず振り返った私の眼に、それは映った。

光の中に浮かぶ黒い姿。

それは長い髪を持つ、少女の姿を模った黒き闇。

無風の中で不自然になびく髪はどこまでも黒く、ゆっくりと動くその体は肌から何まで全て闇色に染まっている。身に着けた軽装の鎧も言わずもがな。

絶句する私の前、闇は何も喋らない。ただゆっくりと、私がよく知る動作で背中に手を回す。

無の空間から引き抜かれるは絶対なる破壊力——大剣。

そして、私はその姿を良く知っていた。

たとえ色が違っても、その姿形を見ればそれが誰だか判別できる。だって、それは私が作った姿なのだから。

「……私!……まさかッ!？」

記憶を探る。前に志乃さんとルーンの三人で一緒に行った草原エリアで、その話を聞いたはずだ。

『ほら、早く行こう。草原エリアですつとのんびりしていると、アイツが出てくるぞ』

『え、ルーン、“アイツ”って?』

『ああ、そつか。リリナは見たこと無いよね?凄く強い、黒い影のモンスターなんだけど……』

人の姿を借りその黒き影。  
その名は、確か。

「……ドッペルゲンガー!!」

私が呼ぶ名に呼応するように、私の影は大剣を振り上げた。

## FILE 16：月影に宿る者（後書き）

・・・色々と立て込んで更新スピードが低下しています。本当にごめんなさい！！

次も少し遅くなる可能性があります・・・バトル描写が苦手なので（汗）精進します。

ご感想・激励などございましたら宜しく願います！

FILE 17：其なる闇を打ち破れ（前書き）

宵闇小闇の月明かり

さあさどつぞと幕は開け

影持つ娘と意思持つ影の

剣と死闘の舞踊曲

## FILE 17：其なる闇を打ち破れ

月光に支配された場で、白い“人”と黒い“影”とが交錯する。  
黒い影が恐ろしい勢いで振り下ろす呪杖をバックステップで飛び避け、自らの杖に召喚起<sup>よび</sup>こし留めていた強き光を呪紋を合図に開放する。

「レイザスッ!!」

その一声を皮切りに開放された光の奔流。それは一つの束となり、その場の光にも飲まれぬ清い力で闇に向かう。

食らえば相当の痛手となるはずのその光の束は、しかし闇に当たる前に全て掻き消えた。

「っ!？」

予想外の出来事。すぐさま志乃は影が自分と同じ体制で杖を構えているのを視覚で確認した。

(・・・同じ呪紋で相殺・・・?)

それは、呪紋ではお互い殆どダメージを与えないという事だ。だが逆に言えば、向こうの呪紋もガードできる。

(・・・でもあんまり喜ばしいことじゃ、ないか)

しかしそれは同時に、至近距離からの呪杖での打撃戦となるという事。回復・補助呪紋に特化した呪癒士は、戦闘能力が低く使える攻撃呪紋も限られている。今まではエリアモンスターとのレベル差があつたから戦い抜いてこれただけのことだ。今、目の前に相対するは自らの影ドッペルゲンガー。今まで出てきたモンスターとは比べ物にならない強さのはずだ。

（長くなりそうだな・・・）

しかし、今の呪紋で分かった事もある。

通常フィールドに現れるドッペルゲンガーは、強さをそのプレイヤーの5Lv上と設定している。全力を尽くしてもそのレベル差は中々に深く、普通に戦えば負ける確率の方が高い。

だが、今日の前にいるこの影。お互いの呪紋を相殺したことから考えて、実力差は無い。レベルは同じはずだ。多分ステータスも同じなら、この勝負に勝つためには何に差があればいいのか。

答えは簡単だった。

「悪いけど——」

志乃はぐっと、自らの手に力を込めた。

「私、影には負けないよ」

NPCとプレイヤーには決定的な違いがある。

同等の力であっても、その違いは差を生むはずだ。

「私は早くこの先で、リリナと合流しなくちゃいけないの」

志乃は、影に向かって駆け出した。

\*\*\*

ガイイイイインツツツ！！

重たい鉄が、岩を叩く。自分のすぐ真横で響く鈍い金属音の反射に私は耳を竦ませた。

一旦後ろに跳び、剣を手中に引き出す。構え、距離を置いてから改めてその敵を眺めた。

私にそっくりの、私とはまったく違う闇。

「これがドッペルゲンガー・・・！」

普通はフィールドにしか現れない、かなり強いモンスターだという。

詳しい話は聞いていないが、プレイヤーの姿をかたどった影の姿で現れるらしい。間違いなく目の前に居るこれだ。

影は言葉を発する事もなく、静かに、しかし多大なる威圧感を持つて私に向かって踏み込んでくる。

打ち付けられた大剣と大剣が火花を散らす。膠着する刃と刃。

今まで自分が打ち倒してきたモンスターより断然強いのは、すぐに分かった。

（志乃さんのところにも、こんなやつが！？）

ドッペルゲンガーは通常、三人組のPTだとしても一人しか現れない。という事は、このPTメンバーを単独行動させるという不可解なルールはこの為だったのではないか？

つまり、一人一人がちゃんと自分の影と戦わなければならない。己の力と同等、もしくはそれ以上の力に打ち勝たねばならない。

これは、そういうクエストだったのだ。

「きやつー！」

突如力の拮抗が、崩れた。

刃の力に押され負けして突き飛ばされたのは私。姿勢を低くし地面を掴むことで後ろに倒れる無様な姿だけは避ける。体制を立て直し顔を上げれば剣戟が迫る。

「くっ……」

今は別のことを考えている場合ではなかった！

敵の凶刃を飛び避けつつ自らの力を横なぎに振るう。影もまた、それを受けずに飛び避ける。

私と影の間には剣一本の距離。それでも間を空けることなく影は狙ってくる。

一閃、二閃、受け止めるたびに金属音は甲高く響く。

（……ッ、強いッ）

力は五分だ。全ての剣戟を受け止められるのがその証拠。

だが、今までモンスターと戦いながら来た私に対し、向こうは完全に無傷のままでの戦闘。そのうえ、戦闘経験が乏しい私に対して向

こっちは戦闘をプログラミングされたNPCだ。その動きは一般モンスターよりも鮮やかに仕上がっていて、まるで対人戦闘の様相。対人戦に関しては殆ど経験のない私に、この戦いは難しかった。

「いつっ」

避けきれなかった相手の剣が腕を掠めた。また私のHPは削られる。

（回復、しなきゃ——）

回復したくてもアイテムを使う隙がない。後ろに飛べばその直後、刃が狙って降ってくる。

防戦一方。しかも、少しずつ押されているのは自分。

せめてこちらに攻撃するチャンスがあれば、流れを変えられれば、勝機は見えなくもないのに……！

「きゃあっ！！」

剣の鍔迫り合いになったかと思った直後、影は自らの剣の柄を——私の腹に突きこんできた。

クリティカル・ヒット。予想外の攻撃は急所に直撃した。柄であったもののその威力は凶器に値する。そのまま吹き飛ばされた私は、岩壁にその身を強かに打ち付けた。

HP欄。表示されるのはごっそりと削られた私のHP。目の前。止めをささんとはかりにゆっくりとこちらに向かってくる影。あっという間に、絶望的なまでの絶体絶命状態。

視界に映るもの全てが、この勝負の結末を映そうとし始めていた。

「……！」

負けるのか。

そっだ、負けるのだ。

当然のように。自然の摂理のように。

弱い自分が、強い影にやられるのだ。

“……こんなもの……たかがゲームだ”

“今ここで負けたところで、それがなんだというのだ？”

弱い心に、脳裏に、甘い誘惑の言葉が走る。

“皆、娯楽として戦いを楽しんでいるのだ” “負けたら笑って電源を消せばいい”

“負け たつて・・・別にいいではないか”

“諦めてしまえ。だって所詮・・・これはただのゲームなのだから。”

「——ッ!!」

私は引きずられてしまいそんな心を叱咤した。

違う！負けて良い訳がない！

志乃さんと一緒に、クリアしようと誓ったのだ。この先に志乃さんを待たせているのだ。

ああ“ただのゲーム”大いに結構、皆から見ればそうかもしれない。でも私にとって、これは“ただのゲーム”ではない。

このゲームを始めた理由、二度と引きずられぬようしっかりと心に刻み込め。

私は、ルーンのように強くなりたい。

かつてルーンが信頼し、背中を預け共に戦っていた黒き薔薇のような位置に、私も立ちたい。

気も心も弱くて姉や親友に迷惑をかけ、それでも尚未だ改善する事の出来ない自分を脱ぎ去りたい。そしてここのなら、脱ぎ去れるかもしれないのだ。ここに可能性がある。

——強くなりたい。否、なつてやる。

そのために私は、このゲームに入ると決めたんだ!!

ここは私が、「鈴菜」が「リリナ」変わる世界。 “ただのゲーム”とは言わせない。

だからこんな影に、モンスターなんかには負けている暇はないのだ。諦めて良い訳、・・・ない。

私は志乃さんの所に行かなくてはいけないのだ！

——志乃、さん？

脳裏に掠めた、その白い姿に・・・私ははっとした。

慌てて確認する。いつもそれなりに持ち歩いていた“あれ”。ある。手元にある。

真っ直ぐに前を見る。ゆつくりとした足取りで、剣を片手に黒い影が這い寄って来る姿はまさにホラーだった。今まで来た道のりなど比べ物にもならない恐怖を映す画面。だが、不思議と怖くない。私は「リリナ」だから。

あと少し、もう四歩程で奴の間合い。私は影の餌食となる。私は静かに、背中に手を回した。確認する。・・・いける。

一歩。

私は静かにそれを取る。

一歩。

影は剣を両手でしっかりと握りなおす。

一歩。

私は静かに、手を握り締める。

一歩。

影が剣を振り上げ——私に向けて、何もためらう事もなく、振り下ろした。

「食らえーッツ！！」

その瞬間を、奴が大剣を振り上げ、大きな隙を作る撃剣士に特有のその瞬間を、私は見逃さなかった。

奴の懷に飛び込んだ私の右の手には、——指に挟まれた一枚の符。NPCには使うことの出来ない、呪紋を封じたアイテム。

私は、影のその腹に叩きつけた！

「鉄崩水てつかいすいの呪符

”！！”

符は、私の言葉と同時にその封印を解き放つ。

開放されたその魔力は荒れ狂う水の流れを呼び起こし、一瞬にして影を弾き飛ばし岩に叩きつけた。

撃剣士には魔法は使えない。私をコピーして生まれた影もまた同じ。だが、呪紋の力を封じたアイテムは・・・影には使うことが、できない！

影がゆつくりとその身を起こす。呪符の呪紋自体では大きなダメージは与えられていないようだが、叩きつけられた時のダメージは大きい。すぐに体制を整えられていないのはその所為だ。私と影の間合いは空いた。

私はすぐさま次の呪符を叩きつけた。

「怒塊どっかいの呪符

”！！”

立ち上がったばかりの影に、土塊が降り注ぐ。影を覆いこみ、潰してしまおうというように。

もちろんこれも小規模な呪紋で、深い傷を負わせることは出来ない。だが、私の狙いはそこじゃない。

（もういっちょ！）

土塊が消える前に、私はもう一枚の呪符を掲げた。

「威吹いぶきの呪符

”！！”

声に応えるように、呪符から強い風が巻き起こる。それは一つの渦を巻き、小さな突風となり影に向かって吹きつける。

——先ほどの土塊を巻き込んで。

勢いで巻き上がった土煙は影の視界を。  
猛烈な風の音が聴覚を。

そしてそれらが同時に、私の気配までもを遮った。

影は容赦ない呪紋に巻かれ、さっきまで戦っていた獲物が居なくなり、影は困惑する。

そして困惑には——隙がついて回るもの！

「あああああああッッ！！！！！！」

突然の声と気配に影が反応する時間は与えられず——  
土埃を切り裂き背後から飛び出した私の剣は、

しつかりと影に、突き立てられた。

「——！！！！」

影は大きく口を開き、しかしそこから声が出る事はなかった。  
がつくりと、その黒い姿が頭をたれる。

そして、ゆっくりと、ゆっくりと、薄れて——掻き消えてしまった。

「・・・た、倒した・・・？」

呆然とする私の目の前で、カランと小さな音がした。

見れば、拳ほどの大きさの球体が落ちていたのだった。宵闇のように暗く、漆黒の色をした宝玉。拾い上げると名前が表示される。

「<sup>かけよび</sup>影召喚の宝玉”・・・？」

ふと、私はマップに目をやった。

「・・・開いてる・・・」

来た時は間違いなく壁だった場所が、道となっている。

「・・・・・・・・」

ドッペルゲンガーを倒すことが、この道を開く条件だったようだ。

私は、自分でも無意識のうちにその顔に少しだけ、笑みを浮かべた。

さあ、志乃さんの所に行こう。

冷たい月明かりを背にし、私は道に向かって駆け出した。

## FILE 17：其なる闇を打ち破れ（後書き）

・・・お、遅くなりました・・・

ええもう大ツツ変遅くなりました！申し訳ないです！！

とりあえずもう私にバトルは無理と。ええぐつたりです・・・orz

あ、タイトルの「其」は「それ」と読みます。それと前書きの「舞踊曲」はそのまま「ぶようきよく」とお読みください。

そろそろ、もうそろそろ・・・彼を出したい今日この頃です。

次回はもっと早くなるよう努力いたします！

感想・激励等ございましたら是非。

FILE 18：その剣は誓いの下に（前書き）

闇と光の夢幻の輪廻

闇の次にはほら光

そして光のその次は、

## FILE 18：その剣は誓いの下に

暗い道を私は走る。長い道をひたすら走る。時間をかなり喰ったと思う。志乃さんはきつと先に居る。思えば思うほど募る気持ち。走り続ける。

あの眩しいばかりの月の明かりはもう届かない。あの不思議な植物の光だけが足元をぼんやりと浮かび上がらせている。もうモンスターもギミックもない。ただ静かで、暗いだけの道だった。洞窟に虚ろに響くのはこのPCからだが立てる足音のみ。

その最奥に——赤い光を放つオブジェクトが一つだけ、ぽつりと置かれていた。

今まで何度も、このエリアでも何回か使ったそれ。

行き着く先はおそらくは合流地点だろう。そう見切りをつけた私はそれを迷わず起動させた。

光が体を包む。ワープシステムが作動した。

降り立った場所は、最初に二人で別行動をとらされることとなったあのワープポイントだった。ただしあの時とは違い、行き止まりだったはずの場所に道がある。道の奥にあった灰色の岩壁が消えている。ドッペルゲンガーを倒したからだろう。込んだ仕掛けだ。

そしてこの場所には、

「リリナ！」

「志乃さん！お待たせしてごめんなさい！」

予想通り——白い服の女性の姿があった。

「うっん、私もついさっき来たところ。——リップス！」

「えっ？」

突然志乃さんが私に向かって回復呪紋を放った。“リップス”は初期に覚える回復呪紋なので回復量は少ないが、私のレベルから見ればかなりの治癒能力がある。

「回復。ちゃんとしなきゃ駄目だよ」

癒しの光が私の体に染み渡り消える。志乃さんにそう言われ、私はやっと気が付いた。

「あ・・・そうだった」

ドッペルゲンガーと戦った直後、そのままモンスターの出ない通路を通ってここまで来たので、回復アイテムを使用するのを忘れていたのだ。

「忘れてた・・・ありがとうございます、志乃さん」

「どういたしまして」

志乃さんは微笑みを浮かべ、それにしても、と呟いた。

「凄いね、リリナ。ドッペルゲンガーを倒したんでしょ？」

「・・・って事は、やっぱりそっちにも出たんですか？」

「うん。やっぱり自分と同実力の敵って強いよね。お陰で時間がかつちゃった」

そっちはどうだった？と志乃さんが尋ねてくる。

私は——・・・今さっきの、影との戦いを思い出す。

絶体絶命の時に浮かんだ志乃さんの顔を見て、呪紋の力・・・呪符という活路を見出した事。

「・・・私がドッペルゲンガーを倒せたのは、志乃さんのお陰ですよ」

私は微笑んで——そう答えた。

案の定、志乃さんは驚いたように・・・それから不思議そうに、疑問符を浮かべた。

「どうして？リリナが自分の力で戦って倒したんでしょ？」

「それでも——それでも、これは志乃さんのお陰なんです」

私はにつこりと笑って、それだけ言った。嘘は言っていない。これで十分だと思った。

志乃さんは、思わずというような笑みを零した。

「ふふ、変なリリナ」

それから、影を消し去った事で新しく開かれた道を指差した。

「じゃ——行こうか」

「はい。このクエスト、終わらせちゃいましょう！」

私は志乃さんと並んで、暗い道に踏み込んでいった。歩きながら、志乃さんはふと私に尋ねた。

「そういえば・・・一人で大丈夫だった？暗かったし、ドッペルゲンガーだって結構怖かったと思うけど」

「え？」

一瞬、何を聞かれたかと思った。だがすぐにそれが自分の怖がりよ  
うを指しているのに気が付いた。

「ああ——確かにかなり怖かったですけど。でも、」

「？」

「今の私は“リリナ”なんだって思ったら・・・何か、不思議と怖  
くなくなっただんです」

「——」

ただの気休めの演技<sup>ロール</sup>じゃないのかと言われればそうかもしれないけ  
れど。

けれど確かに、自分が“英雄に憧れる鈴菜”ではなく“英雄を目指  
すリリナ”だと思ったら・・・いや、信じたら、急に恐怖が薄れた  
のだ。

「そっか」

志乃さんは、何かに納得したように頷いただけだった。

でも、私の言いたかった事は伝わった気が、する。

\*\*\*\*\*

ダンジョン最奥、獣神像の場に私と志乃さんは程なく到着した。

「・・・着いたね」

志乃さんは獣神像の前に転がる様々なアイテムを見た。

場所自体は他のダンジョンの獣神像の場と何の変哲もなく、荘厳な  
雰囲気のBGMに上から降り注ぐ神秘的な光が美しい。

が、この場所がクエスト専用エリアだからだろうか。

この場所には——様々な物が無造作に転がっていた。謎の本。聖杯のような器。土くれで作られたような人形。怪しい紋様が光る小瓶には謎めいた色の液体が入っているようだ。

私は近くに落ちている本を拾い上げる。

何かの魔法陣のような不可思議な紋章が浮かび上がる表紙。ページをめくると、記号がのたくったような文字が並ぶ。表示されたアイテム名は“妖術使いの魔典”。

「・・・これを持って帰るんですよね？」

クエスト内容は確か、呪具や法具の回収だった。

（それにしてもまあ、どうしてこんなに無造作に色々転がっているやら）

思わずそんなことを考えてしまう。

そしてそこまで考え、ふと思い出した。

「そうだ、このアイテムの中から一つ貰えるんだったっけ」

「うん、それが今回のクエストの報酬だったね」

志乃さんも手近にあるアイテムを拾いながら言った。

「その魔典は多分武器、じゃないかな。魔典を装備できるのは魔導士<sup>ウオーロ</sup>だけだから、私達には使えないけどね」

志乃さんの言葉に、私は手元の本をまじまじと見つめた。

「さ、早く集めよう？ 私達が貰うものも、決めなくちゃいけないんだし」

「あ、はい！」

私は慌てて手近なものから拾い始めた。

魔典、双剣、刀剣、槍・・・武器だけではなく、青い金属で作られた荘厳な鎧や、不思議な模様の刺繍の入ったローブといった装備品。土くれ人形は装備すると、HPがゼロになっても一度だけ復活させてくれる魔法の身代わり人形だと説明が出る。小瓶の液体はステータスアップアイテムだ。

（どこが、実験用の道具・・・）

ゲームのクエスト使用なのだからしょうがないのだが、思わずツッコミを入れた。

次々と拾いながら、私はふと顔を上げた。

「あ・・・」

私の目に入ったのは、上から溢れるような光を一身に受け止めている獣神像だった。

巨大で厳つい獣神の姿が光に照らされ輝いている。どのダンジョンにも似たようなものが設置されているが、それでもその美しさは相変わらずゲームとは思えないほどに素晴らしいと思う。

だが、私の目が吸い寄せられたのは像ではなかった。

その獣神像の傍らで、神聖な光を浴びて煌めく“それ”に、私は釘付けになっていた。

一言で言えばそれは、世にも美しい大剣であつた。

大樹の幹を連想させる色合いと威厳を醸し出した柄は、三つの細い幹が寄り合うように一つの樹を作り上げているようなデザインになっている。

大いなる鷹がその翼を大きく広げている姿を刻んだ鰐には、中心に青い宝玉を埋め込まれ、

そしてその刀身は、色鮮やかで美しく透き通った、碧の水晶で形作られているのだった。

「綺麗・・・」

思わず口をつくのは、そんな陳腐で、しかし何よりも純粋な感想。

私はその剣の傍に近寄った。近寄っていくたびに、胸が少しずつ高鳴っていく。

その刃に光を浴びた剣は惚れ惚れするほどに綺麗だ。

恐る恐る、手を伸ばした。手が震える。それは、今まで見たこともなかった美術品に合間見えた瞬間の感動にも似た感情。触れることなど恐れ多いと恐怖すら感じさせる威厳・・・いや、これは尊厳。尊くおごそかで侵しがたい雰囲気を持つそれ。

震える手が、柄を触る。

意思が上手く疎通できなくなってきた指を叱責し、それを・・・握る。

指が、しっかりとその柄を握った瞬間、

——これがゲームの中だと分かっていたながら、頭でちゃんと理解しながら。

・・・確かに、心がしっかりと、手に馴染むその感触を感じた。

「——」

震えが、止まる。

両手で柄を握り締め、その手を力を込めて上に。ゆっくりと、ゆっくりと、その剣を抜いていく。

やがて、その剣が完全に抜け去り——掲げた大剣は光を大いに受け止め、美しい輝きを増した。

その美麗なる聖剣の名は——

“大樹剣・世界樹”<sup>ユグドラシル</sup>。

「リリナ？どうしたの？」

志乃さんの声に私は振り返った。

「志乃さん。私・・・報酬、決めました」

志乃さんはその視線を私の掲げる、世界樹の名を冠した剣に向けた。  
「・・・綺麗・・・」

最初に志乃さんの口から零れたのは、私と一字一句まったく変わらない一言。

純粹で嘘偽りや思惑のない、心からの賞賛だった。

やっぱり、この剣を選んだことは間違っていない。確信した。

この剣を握ったときに、感じた何か――。運命やら定めやらはあまり信じたことはないが、この剣と巡りあった事は偶然ではない気がする。

私は引き抜いた剣を振る。

初めて手にしたとは全く思えないほどに、私に馴染むその剣。じふぎ

「淒く、似合ってるよ」

志乃さんが微笑みを浮かべて言った。

「ありがとうございます」

リリナはその剣を、しっかりと見つめる。

初めてのクエストで手に入れた。

この世界でとるべき、目指すべき自分の姿を見つけることができたその日に。

運命のように私はこの剣に出会った。

今日は何と良き日か。古臭い言い回しだが、これほどまでに私の心境にしっくり馴染む言葉はない。

自分が成長した証の剣。

純粹に、嬉しいと思った。楽しいと思った。

このゲームをやっていて、よかったと思った。

志乃さんが居てくれて、よかったと思った。

このゲームに、志乃さんに、目標である女戦士に、全てに感謝した。

この直後に起きる災を知らぬ私は、深き喜びの中に居た。

今日は何と良き日か、と。

まさか、それがひっくり返るなんて思いもよらずに。

## FILE 18：その剣は誓いの下に（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありません・・・！

次回、英雄メンバーを登場させます。が、彼らのファンである方にはあまり見せられないシーンとなっております・・・うう、私は彼ら大好きですよ？

次回を境に物語りは一気にRootsへ。もうすぐハセヲ君も出るかもしれません・・・。

感想、激励、誤字報告等ありましたら是非是非。

あと、更新が長引いているお詫びとして企画を一つ。登場させて欲しいキャラクターを募集します。

このままだと原作沿いのストーリーの都合上、エン様や朔望達が出るのが遥か先になってしまうので（！）

皆様の好きなキャラクターを集計しまして“一番・二番人気だったキャラクター”を先に登場させてみようかと思っています。

一人1キャラクター一票、メッセージか感想ページより投票してください。

皆様のご協力をお待ちしております。

FILE 19・嵐の前の、（前書き）

出会えた奇跡

失う予兆

それらはそう

カミヒトエ

## FILE 19：嵐の前の、

「△隠されし 禁断の 絶対城壁」・・・最果ての門、モーリー・バロウ城砦と呼ばれる失われた過去ロスト・グラウンドの遺産に、五つの人影があつた。

「——ここも、何もなしなあ」

オレンジ色の服を着た双剣士の少年が辺りを見回した。

小さなエリアだった。終わりの見えない巨大な一枚岩がひたすらに続くだけの場所。

その岩壁から少し突き出した岩場が、このエリアで出来る行動範囲。この広大な景色の中に対してあまりにも小さすぎる範囲である。

長い年月を重ねて茂ったらしい草が風にゆれる。まるで断崖絶壁に浮かべられた、切り取られた小さな草原のような場所だった。

紅い髪を揺らし、古代の魔法文字の名を冠した女戦士は振り返る。

「ああ、そうみたいだな。・・・私は一度一人で回っているし、予想はしていたが」

「ていうか・・・ホントに何にもねえんだなー、ここ」

体中にペイントを施した半裸の戦士が、一枚岩を見上げた。分断された青空が、ただゆったりと雲を流している。現実と寸分違わぬ美しさには脱帽するが、それだけだ。他に何かあるというわけでもない。

「・・・居ないわね、どこにも」

黒き薔薇の戦乙女が、ポツリと・・・呟いた。

そう、会うために。ただ会うために英雄達は世界を訪れたのだった。しかし——彼女は、

「どこにも、居ない・・・」

双剣士が自らの腕を握り締めた。強い力を秘めた腕輪が、確かに其処にはめられている。それは疑いようもない事実で、そしてそれが彼女の存在を主張する。

「・・・そんなに落胆する必要は、無いと思うが？」

暫しの沈黙の後に、口を開いたのは銀の鎧と白い羽の剣士だった。

「・・・どゆこと？」

戦乙女は思わず振り返った。戦士と双剣士も剣士に顔を向ける。

剣士は紅い女戦士の方を向いた。

「・・・ルーン。お前は一番重要な場所を後回しにしているだろう？」

「・・・ああ。そうか、バルは別PCとはいえここにずっとログインしてたんだもんな」

ルーンはしれっとした顔で頷いた。

「一箇所、心当たりはある。ここよりずっと可能性が高いところを」

「「はあ!？」」

戦乙女と戦士の素っ頓狂な声が、重なった。

「・・・ルーン、それはどういう事？」

双剣士が心持ちとがめるような口調で問いただす。バルムンク以外の二人も、心なしに剣呑な目でルーンを見た。

それも当然のことだった。探すべきもののある場所に心当たりを持ちながら、その事を話さずに隠しているなどと、言語道断ではないか。

ルーンは小さくため息をつき、黙って美しい紅髪を掻き上げた。何かあるたびにでる彼女の癖だ。あの時と幾分も変わらない行動だった。

「・・・“天隠すもの”グリーマ・レーヴ大聖堂、だ」

「？」

「“隠されし 禁断の 聖域”、と言った方がいいか？カイト、オルカ、ブラックローズ」

カイトの目が、はっと見開かれた。

残りの二人にしてもそれは同様で、驚きに目を見張っていた。

「残ってるの？“隠されし 禁断の 聖域”が?!」

カイトはそういう傍ら、そのことに納得していた。

今まで回ったエリアが残っていて、“隠されし 禁断の 聖域”が残っていない方が不思議なのである。あの場所は他のエリアとは何もかもが違っていたのだから。

“隠されし 禁断の 聖域”。

「The world」の世界観の元となった抒情詩「黄昏の碑文」において、始まりの地と称されたというその湖の上の神殿。

鎖に貼り付けにされたアウラ像が冷たく鎮座していた場所であり、カイトがブラックローズに・・・否、他人に対して初めて、自分がこのゲームを始めたきっかけを口にした場所であり、カイトとブラックローズとバルムンクが初めて一堂に会した場所でもあり、ブラックローズが最愛の弟を失った場所であり、そしてその事を落ち込むカイトに告白した場所であり。

そしてそれ以前には、“Key of The Twilight”をめぐつてとある者達が道を切り開いた場所でもあった。

そこは何もかもが、特別な場所だったのだ。

「隠されし 禁断の 聖域・・・もしそこに何も無かったら、多分もうここには“——”は居ない」

ルーンは呟いた。

「だから、最後に行きたかったんだ。・・・特別な場所だから」

「・・・そうだね」

カイトは頷いた。

「“——”が居るなら、あの場所しかないよ」

空を見上げる。

綺麗な青空が広がっている。

けれど、あの女神に相応しいのは、やっぱりあそこなのだ。

「・・・もう、私の知っている限りのロスト・グラウンドは一箇所しかない」

ルーンは顔を上げた。

皆が頷いた。

「行こう、皆。——グリーマ・レーヴ大聖堂へ！」

\*\*\*

「どうもありがとうございました。おかげで助かりました」  
依頼者のソースラーは、相変わらず淡々とした言葉を並べるだけだった。

何はともあれ、色々あったがこのクエストをクリアした私と志乃さんはクエスト屋に戻ってきていた。クエストクリアの報告をして、初めて報酬が受け取れるのだそうだ。

「お二方は、どのアイテムを選びましたか？」  
ソースラーが聞いてくる。

「あ、えつと・・・私はこれ」

私は画面に現れたリストから大樹剣・ユグドラシル世界樹を選択する。

志乃さんはしばらく悩んだ後、全てのステータスがアップする教本を選択した。

そしてアイテムが贈られ、謎めいたクエストはようやく終了した。

私は早速剣を装備する。街中なのでグラフィックでは確認できないが、なんだか凄く誇らしい気分になった。

「リリナ、ちよつとこつち向いて」

「何ですか、志乃さん？」

振り向くと、志乃さんが私に向かって本をかざしているのが見えた。瞬間、私の体が光に包まれる。

「え？」

光が消えたとき、私は自分のステータスが全て少し上がっているのに気が付いた。

「え？ええ！？志乃さん、これ・・・！」

「お礼だよ」

志乃さんは笑った。

「今日はクエストに付き合ってくれてありがとうございます」

「え？そ、そんなっ」

お礼を言わなければいけないのはこっちの方だった。

「いいんですか！？頑張つて手に入れたレアアイテムなのに・・・」  
「気にしないで？リリナが頑張った、ご褒美でもあるんだから」

その笑顔を見て、私は気が付いた。

志乃さんは高レベルプレイヤーなのだ。普通にこのゲームを遊ぶ分には、レベルで不自由することは無いほどに。だから当然、ステータスアップのアイテムなんて必要ないはずなのだ。

なのに志乃さんは、あのアイテムを選んだ。

（最初から、そのつもりで・・・？）

何か熱いものが私の胸の奥からこみ上げてくる感触があった。

「・・・志乃さんって、本当に優しいんですね」

私は精一杯の笑顔で、笑った。

「ありがとうございますっ！！」

その後、私と志乃さんはドーム前のプラットフォームで別れた。

最初はどこかエリアに出て武器の使い勝手を見てみようかという話になっていたのだが、“黄昏の旅団”<sup>アットホーム</sup>の集合がかかったとの事で、

志乃さんはギルドの専用@homeの入り口があるマク・アヌの傭兵地区へ向かっていった。

「何か、新しい情報でもあったのかな・・・」

とても興味をそそられるが、旅団員でもない自分が行くわけにも行かなかった。

「まあ、仕方ないか」

セーブして今日は落ちよう、と私は足をそのままドームに向けて踏み込んだ。

相変わらずの美しさも、もはや見慣れたものだった。感嘆の吐息をもらうこともせず、迷うことなく足はセーブ屋に向かう。受付のヴァイタルビスタに話しかけ、ゲームの記録はつけ終わる。

「さて、落ちようかな——」

今日、お姉ちゃんに遅くなるだろうか？晩御飯は用意した方がいい

だろうか、そんなことを考えながら、私はログアウトのボタンを選択しようとした。

その時、カオスゲートが瞬いた。

誰かが転送されてきたのだろう、五つの光がそこに現れ、すぐさま人の形を形成してゆく。カオスゲートはタウンとエリアを繋ぐ唯一の出入り口だから、特に珍しい光景ではない。だが、そこに旧知の人間を見止めた私の手は止まった。

（あれは・・・ルーン？）

見慣れた紅い髪、金糸と皮の鎧、頬に刻まれたカノのルーン文字。世界に二つと無いあのPCボディは、確かにルーンだ。

ルーンはこちらに気づく様子も無く、直ぐに振り返って他の四人に話しかけていた。

何を話しているのだろうか？ 会話はよく聞こえない。が、全部で五人居るせいかわパーティチャットにはなっていないようなので近づけば聞き取れそうだ。

私はそつと、五人に気づかれぬように近寄ってみた。

「・・・わね。ちゃんと確かめられればいいんだけど・・・」

ルーンの傍、褐色の肌の戦乙女が呟くように喋る声が、少し耳に届いた。

「・・・居るよ。腕輪と指輪、何より僕達がここに居るのが何よりの証拠だ」

オレンジ色の服を着た少年がぐつと右腕を握り締めている。

「ま、ここまでひっぱつていて何も無いってこたあないだろうけどな」

半裸の戦士がざつくばらん言葉を発し、近くに居た銀の鎧の剣士が頷いた。

「何はともあれ、行ってみるしかないだろうな」

「ああ・・・会いに行かないと」

ルーンは深く頷いて、言葉を続けた。

「信じよう・・・“アウラ”は絶対、“隠されし 禁断の 聖域”

に居ると」

「——アウ・・・ラ!？」

思わず口に出してしまった。

アウラと言えば、確かこの世界にいる女神様の事ではなかったか？ゲームの設定の世界観の女神様の名前を、確かに今、ルーンは口にした。

「誰だっ!？」

ばつと、ルーンが振り返る。その顔に、私が今まで見たことの無い様な厳しい表情を浮かべていて、私は思わず固まってしまった。目が合う。暫しの沈黙。ふつと、ルーンの表情が柔らかくなった。

「何だ・・・リリナか」

その笑顔に、私も緊張を解く。

「ルーン、今日は出かけてるんじゃないの？」

「ああ。今はネットカフェからログイン中だ」

「ちよつとルーン!誰なの、この子？」

不意に、褐色の肌の女性が会話に割り込んできた。

「お前達が一番会ってみたいって言うてただろ?妹だよ、私の妹」  
ルーンの後ろに居た四人組の表情が、一瞬にして驚きに塗られた。

「この子が、ルーンの妹!？」

その反応に私は驚きだった。妹ってそんなに珍しいものだろうか？

「リリナ、自己紹介」

「あ、うん」

私は頷くと、驚きで固まっている四人に向かってぺこりと頭を下げた。

「えつと・・・リリナ、です。よろしくお願いします」

「あ、ああ・・・こちらこそ」

「へえ・・・これが噂の・・・」

「え・・・噂？」

「あ、いやなんでもないのよ？」

女性は何かを誤魔化すように笑った。

「あ、自己紹介しないかね」

オレンジ色の少年PCが思い出したように言う。

「初めまして、リリナ。僕の名前はカイト。お姉さん——ルーンとは長い付き合いなんだ。よろしくね」

「俺はオルカ！んでもってこっちの無愛想なのが」

「バルムンクだ。・・・オルカ、喧嘩でも売ってるのか？」

「まさか」

「よ、よろしくお願いしますっ！」

温和な雰囲気の人がカイトさん。厳つい外見とは裏腹にフランクなのがオルカさん。西洋の聖騎士のような姿をした人がバルムンクさん。私は頭に叩き込み、ふと思った。

「バルムンク・・・って、ニーベルングのジークフリートの剣ですか？」

昔読んだ「ニーベルングの歌」という悲劇の物語に、バルムンクという剣が登場していたのを思い出したのだ。バルムンクさんは少し驚いたようだった。

「よく知ってるんだな。ああ、その通りだ」

お前の妹はお前と違って学があるんだな、とバルムンクはルーンを振り返った。

「ほっとけ」

ルーンが苦笑する。そんな顔を見るのは初めてで、ちょっと驚いてしまった。

「ちよつとお！話で盛り上がるのも結構だけど、私の自己紹介もさせてよね」

褐色の女性がちゅうもーく！と言わんばかりに手を叩いた。

「あ、ごめんなさい・・・」

慌てて謝罪すると、

「いいよ、別にリリナちゃんのせいじゃないし。その辺の裸男と羽根男のせいだから」

ケラケラと女性は笑った。

「いやなんで俺たちのせいよ!？」

オルカがツツコミを入れ、バルムンクは呆れたように肩をすくめる。  
「さて、と。アタシの名前はブラックローズ!ルーンの姉貴分って  
トコかしら」

「え、どこが？」

小声でカイトさんが呟いたが、ばっちりブラックローズさんは聞いていた。

「カイト、喧嘩売ってるわけ？」

「いや、私もカイトに同感だ」

ルーンが腕組みをしながら深あく頷く。

面白い人たちだなあ、とりリナは微笑ましい気持ちになり、そこでハツとする。

「ブラックローズ・・・黒い薔薇!？じゃああなたが黒薔薇さんなんですネ!？」

「え？」

黒薔薇さんは当然困惑しているようだった。

「私、<sup>ブランドイッシュ</sup>撃剣士なんです」

私は簡単に事情を説明した。

「<sup>ジョブ</sup>職業を選ぶ時にお姉ちゃ——ルーンが黒薔薇さんの話をしてくれました。凄く頼りになる人だって。それで、私すごく憧れてて」  
「へえっつ、そうだったんだ・・・」

なんていうか・・・そういうのって何か照れるわね、と黒薔薇さんは嬉しそうな恥ずかしそうなむずかゆい顔をした。顔が少し赤い。

「ブラックローズみたいに、かあ・・・」

オルカさんが頭をかいいた。

「止めといた方がいいぞー。口悪いし態度でかいし」

「・・・殴られたい？」

「あはははは」

カイトさんが嘖き出した。

「そこっ!笑うんじゃないわよ!!!」

「あははは！うん、ごめんごめん」

カイトさんは笑いを抑えると、優しい目で私を見た。

「リリナならきつとなれるよ」

「えっ」

「ブラックローズみたいに頼もしくて強くて、——ルーンも背中を任せられるような人に」

最後の方は、私にだけ聞こえるように小さく。

私は目を見開いた。会って間もない人に、私の気持ちを見透かされたのだ。驚かないほうがおかしい。

「何で・・・？」

尋ねると、カイトさんは笑った。

「そんな気がしたんだ」答えはたったそれだけだった。

「何の話をしてるんだ？」

ルーンが首をかしげて近づいてきた。

「別に、なんでもないよ？」

カイトさんは笑顔のまま手を振った。

五人の会話を聞いているとよく分かるが、このメンバーのリーダー格なのは他でもないカイトさんのようだった。

カイトさんのことをよく知らない人から見たら・・・私もそんなに詳しいわけではないけれど、きつとバルムンクさんやルーンがリーダーに見えるんだろう。

でもカイトさんは確かにリーダーの素質があるように見える。

人の内面や心内を察し、優しく手を差し伸べたり導いていく力がある。そんな人柄に惹きつけられ、仲間が集う。これこそリーダーが持つべき素質じゃないだろうか。

（目標にする人、増えちゃったなあ）

ルーンに黒薔薇さんに、カイトさん。目標の壁はまだまだ高い。

五人を見る。仲間に囲まれて笑うカイトさんと、その横で楽しみに微笑むルーンがいる。

（・・・頑張らなくっちゃ）  
人知れず、私は決意を固めた。

「それじゃ・・・そろそろ、私達は行かないとな」

ふとルーンが顔を上げたのは、私と会ってから三十分ほどたった頃だった。

「行くつて、どこに？」

私が首をかしげると、ルーンは笑って私の頭を撫でた。

「観光、かな。R2の世界をみんなに楽しんでもらおうと思って、どうかその辺のエリアに行こうと思ってるんだ」

「エリアに？だったら私も、」

ついていくよ、と言おうとするのをルーンは遮った。

「久しぶりの同窓会だ、積もる話もあるからな。悪いけど私たちだけで行かせてくれないか？」

小さくウインク。

「・・・まあ、別にいいけど・・・どうせ落ちようとしてたところだったし」

私は何か違和感を感じた。

「悪いな、リリナ」

ルーンはそういつて笑うと、ぼんぼんと私の頭を叩いてからカオスゲートに向かって歩いていった。

「それじゃ、またな」

「頑張つてね、リリナ」

一人ひとりが私に挨拶をしていって・・・カイトさんたちも歩いていく。

やがて、カオスゲートの光に飲み込まれ、五人の姿は視界から消える。

「・・・・・・・・」

私の中に、何かもやもやとした感情が残っていた。

（何か、おかしい）

そう、何かおかしいのだ。そして、何故か不安なのだ。

（ルーンは、その辺のエリアに行くって言ってた・・・）

ふと、私は自分の頭を抑えた。ルーンが撫でていった頭。気がつく。

（・・・頭を撫でるのは、ルーンが何かをこまかすときにする癖だ！）

ルーンは、ルーンたちは・・・カイトさんたちはエリア観光なんかに行くんじゃない？

私の心を漠然とした、でも強い不安が襲う。

五人を追いかけなければ、と何故か強く思った。

（どこに行つたんだろう・・・?!）

“The world”はエリアワード三つの組み合わせでエリアを作るシステムだ。

作れるエリアの数は無限大。それに、ルーンの持っているエリアワードと私の持っているエリアワードが同じとは限らない。つまり、普通に考えてルーンたちを追うのは不可能だった。

でも、でも、早く追いかけないといけない。そんな気がする。

（どうすれば——！）

『信じよう』

ふっと、頭の中にルーン言葉が浮かんだ。

私が見つかる直前まで話していた言葉。

確か、確かルーンは、どこかのエリアワードを口にはいなかったか？

『信じよう・・・“アウラ”は絶対、“隠されし 禁断の 聖域”に居ると』

（隠されし 禁断の 聖域——！）

私は何も考えられなくなっていた。

カオスゲートに駆け寄り、エリアワードをあわせる。

光が体を包み込む。私は目を瞑って、必死に心で叫んだ。

（カイトさん、黒薔薇さん、オルカさん、バルムンクさん、ルーン・  
・・・！）

お願い、お願い・・・！

（行っちゃだめ・・・凄く、凄くいやな予感がする！！）

視界を覆っていた光が、消えた。

## FILE 19：嵐の前の、（後書き）

更新が遅くなりました・・・！

最後の更新いつ？え、六月・・・！？

PCが調子悪くなりました。

もしかしたら次はもっと遅くなるかも・・・orz

PCが機嫌を直してくれるよう皆様お祈り下さい（汗

それでは、次回はついにあれになります。

感想激励その他もろもろ、ぜひよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6444b/>

---

.hack//a gleam of hope

2010年10月8日22時57分発行